

「待つて下さいませ。」

娘は惟然の袂を離さなかつた。

「何ぢや。」「いえ、もう放しませぬ。せめて家まで御一緒にお入来下さいませ。」

娘は父を引き留めて、何時までも何時までも、かうした姿をして、旅をさせまいと思ふのであつた。

惟然は懐中から、障子の破れ紙に書いた自畫像を取り出した。それは大きな檜木笠を冠つて、杖をついた旅姿で、側には、

重たさの雪拂へども拂へども

と自贊の句が認めてあつた。

「これが筐ぢや。」「それでも御父様、どうぞ、ほんのちよつとでも宜しふございませから。」

惟然はつと袂を拂つて、飛ぶやうに走り走つた。

「もし、お父様……。」

娘は往來に泣き崩折れた。そして下僕や女中に助はり慰められて居る時、もう惟然は他の町に行つて、

「音はあらんか檜木笠、なむあみだく」と唱へて、瓢箪を叩いて居つた。

其の後、惟然の姿は名古屋の町に見えなかつた、其の消息を知るものはなかつたが、正徳五年の二月、旅に歿したとも傳へられてゐる。

美濃、尾張地方には、惟然の遺墨が大分あつた。それによつて見ても、惟然の風

狂が決して心からではなかつたといふことが知れる。

「世の中はしかじと思ふべし、金銀を貯へて人を恵める事もあらず、己をも苦しめんより、貧しうして心にかゝる事なく、氣を養ふにはしかじ、學問して身に行はざらんより、知らずして愚なるにはしかじ……人は知らず實に此道のぬくめ鳥。」

と云ふのもあれば、

ひだるさに馴れてよく寝る霜夜かな

と云ふやうな句も傳へられてゐる。惟然が如何に床しい風格であつたかは、其の手蹟の殊の外に美事だつたといふ事でも知る事が出来る。

### 瀧澤馬琴

#### 一 小君の無謀に憤概

馬琴は、其の姓を瀧澤、名は解、字は瑣吉と云ひ、幼名を倉藏と呼んだが、後清左衛門と改めた。剃髪してからは篁民と稱し、曲亭馬琴と號した。また著作堂、篁笠漁隱、玄洞陳入、魁雷子などの別號があつた。

馬琴の父は興藏と云つて、徳川の旗本松平信成の用人を勤めて居つた。馬琴は其の三男として、明和四年六月深川に生れた。不幸にも幼い時に父を亡つたので、長兄の興旨が家を嗣いだが、間もなく罷めて松平家を去つた後、九歳になる馬琴のみが一人居残つて、若殿の相手をつとめて居つた。

其の頃から、彼は稗史野乘を喜んで居つたが、由來我儘ものと相場 二つた若殿は、ともすれば馬琴を殴つたり、蹴つたり、或る時は四ツ這ひに匂はせて、馬の眞似までもさせられるのだつた。馬琴はそれ等の事に盲従するほど氣骨の乏しい男ではなかつた。

「何だ。若殿が人間なら、おれも人間だ。」と憤慨して、自分の部屋の壁に、

木がしらに思ひ立ちけり神の旅

といふ一句を残して、或る夜ひそかに邸を脱け出した。これはあたかも馬琴が十四の冬のことだつた。

「ああ、もう主取りなんかは懲りく〜だ。」と、松平家を脱出す時然う思つてゐたのだつたが、兄が再三再四勸めて止まぬので、當時兄が仕へて居た、戸田家の徒士と

なつたが、素より氣の進まぬ奉公の事として、間もなく飛び出して了つた。けれども他に好い方法もつかなかつたので、仕方なく其の後二三の旗本屋敷を渡り歩いたが、どこも此處も居續きはしなかつた。

今度は醫師にならうといふ志を起して、幕府の醫官山本宗英の内弟子に入つて、宗仙と號して、傷寒論を繕いて居たのも僅かの間で、次ぎには龜田鵬齋について經書を授けられた。それも中途で廢するといふ風で、一つとして満足なことはなく、それよりも、好きな小説を書かう。著作家にならうと決心して、せつせと書きあげたのは、「壬生狂言」と云ふのだつた。

當時作者として賣り出して居たのは、京傳だつたので、彼はそれを京傳に見せて、自分が小説家として立てるか立てないか、批判を仰いで見ようと思つた。それで其

の稿本を懐中にして、銀座一丁目の京傳の家を訪ふべく出かけたのは、馬琴が二十四歳の血氣旺んの或る日の事だつた。

馬琴は其の容貌魁偉、身の丈と言つたら六尺に餘るほどで、一見力士の様だつたので、初めて引見した京傳は、先づ其の風體を見て吃驚した。

「初めてお目にかかります。手前は瀧澤倉藏と申します。どうかお見識り置きを願ひたう存じます。」  
 「あゝ左様で、其の様な堅苦しい挨拶は止ませう。而して只今承はると、何でも戯作者になりたいとか云ふお望みなさうですが。」  
 「實はその事について、いろく御示教を蒙りたく、御高名を慕ふて参りました。」  
 「いや、其のお言葉には却つて恐れ入ります。」  
 「して何か書いて見ましたか。」  
 「お目にかける様なものではございませんが、ほんのお笑ひ草に持参いたしました。」  
 と言ひながら、

馬琴が懐中から取り出して、京傳の前へ恥かし氣に出したのは、例の處女作「壬生狂言」の稿本であつた。

## 二 京傳に舌を捲かした處女作

京傳は取り上げて、ざつと一枚ばかり目を通してゐるたが、「何れ緩くり拜見するとませう。して、お住居は？」  
 「生れたのは深川でござるが。」  
 「ほう、私も深川だが、深川はどの邊ですかい。」  
 「手前は木場の直ぐ近くで生れましてござる。」  
 「これは妙ぢや、其の木場は私の生れた處だ……。」  
 「左様でござりますが、不思議な御縁でござりますな。」  
 兩人は思はず膝を叩いて進んだ。

「そして、只今は……。」  
 「さア、只今は定まる家もないといふ厄介ものでござつて、武士のなり損ね、儒者のなり損ね、我身ながらも愛想のつきたやくざものでござる。

しかし好きこそ何とかと申します。とても名人上手とまではなれなくとも、多少人に知られるやうなものにはなれ様かと存じまして、實は今日お訪ねいたしました様な譯でございました。「いや、なか／＼面白い。殊に御氣象がどうしても戯作者らしい。私はまた子供の時分から、本といふものを讀むことが嫌ひで、藝人にならうとしてはなり損ね、講師にならうとしてはこれも駄目、散々道樂を仕盡した揚句が、到頭こんな事になつたのですが、お前さんは初めつから好きだといふので、それだけが強味だ。まア精出してやんなさるが可い。」

當時馬琴は三十歳だつたから、京傳よりも六つ年長だつた。これまでは同じ深川に生れ、其處に二十餘年育つたのだが、武士と町人でもあつたし、同じ道に嗜むものでありながら、相見ることがあつても路傍の人に過ぎなかつたが、初めて遭ふて

見ると、まるで百年の知己かのやうであつた。

京傳は心のうちでは、どんなものを書いて來たか、どうせ物好き半分、愚にもつかないものに違ひないと思つて、馬琴の「壬生狂言」を見たが、讀み終らぬうちに、思はず呀と感嘆の聲を洩らした。

「まつたく巧いもんだ。末怖ろしいとはお前さんの事だ。今から二三十年も経つたら、世間では俺の名なんかは口にしなくなるだらう。」と言つて舌を巻いた。

一定の住處もない厄介ものさ、初めて會ふた時に馬琴が言つたが、諸々を渡り歩いた揚句の馬琴には、まつたく住む處もなかつた。京傳は抜け目のない男であつた。かういふ男ならば、食客さして置いて、決して損なことはないと思つたので、家に置いてやることにした。そして、春の賣り出しに間に合はせるために、馬琴に代

作をさした事もあつた。京傳の筆が遅いのに反して、馬琴は殆んど一氣呵成に筆を走らせるといふ風だつたので、馬琴を食客に置いてても、京傳が初めから考へて居た通り、決して損ではなかつた。

其の後馬琴は、京傳の紹介で葛屋の番頭に住み込んだ。後年彼の作が、引證の精博を以て著はれたのは、此家にある間に、暇さへあれば店の藏書を手當り次第に涉つた賜ものに外ならなかつた。

其のうちに、彼は「虱の道行」といふのを署名して著はしたが、それが彼の出世作だつた。其の挿畫は北齋が畫いた。京傳は其の筋の忌諱に觸れて、手錠の刑に處せられ、赦免になつて後も、小膽ものゝ事であるから、其の後の著作は「實語教稚講釋」だの、其の他教訓めいたものや、昔咄などを取り直した、何れも質實なものば

かりになつた。京傳の心を知らないものは、京傳ももう駄目だ。趣向が盡きたのか、以前のやうに面白いものが出来なくなつたと、そろゝ秋風を立て初めたに反して賣れ出したのは馬琴のものだつた。彼の一九だの三馬だのが出たのは、それから後のことだつた。

### 三 馬琴の氣質

人の見るの明があつた葛屋の主人は、馬琴に目をかけて居つた。其の主人の叔父に料理屋を營んで居るものがあつた。其處に一人の美しい娘があつた。叔父も亦早くも馬琴に目をつけて、娘の養子にしたいがどんなものだらう、一つ意中を聞いて見て呉れないかといふので、京傳が馬琴の意中を聴いて見たが、馬琴は唯だ笑つて居て、何んとも答へなかつた。

けれども、主人は熱心に説いた。その餌は、娘の美しい事と、家に身代があることだつた。初めのうちは笑つて答へなかつた馬琴も、度重なると、眉を顰めながら、

「人の袖に縋つて引留め、其の財物を掠めて暮す茶屋小屋渡世と乞食盗人と、どれだけの相違がありません。身體髪膚父母の賜ものを以て、之を潰すには忍びません。どうか悪しからずお断はりが願ひたい。」と、キツバリと断はつて了つた。

斯ういふ氣象の馬琴であつたから、京傳とは到底相容れ様筈がなかつた。馬琴は薦屋に三ヶ年間居て、飯田町中坂の伊勢屋といふ履物屋の後家の處へ入智となつた。けれども勿論店の事などは念頭にかけて、只管筆硯にのみ親しむで居つた。其のうちに家附の娘に聲を貰つて、自分達は別居して、近所の子供に讀み書きの事を教へ

たり、暇々には著作に従ふて、自分だけの暮しは此の方で立てて居つた。

馬琴は京傳と會ひさへすれば、直ぐに金の事や何かをばかり口にするので、さういふ時は、何時も冷かに笑つて居つた。すると或る時、

「俺の子はないが、弟の京山には澤山あるから、相續は誰にでもさせるが、それには身代を残して置いてやらなくちやならない。俺の死んだ後で、女房を零落させる様な事があつては、それこそ俺の恥だからな。」と、末の末までも考へた事を話した。これを聽いてゐた馬琴は、例によつて冷笑しながら、

「それも宜からう。だが、財を遺すは患を貽すで、吾々はやはり子孫のために美田を購はずの方だ。況して女房のためなんか、即ち孔子だつて、其人存すれば則ち其の政存し、其人亡ければ則ち其政も亡しと云はれてゐる。」と、少しも憚る處も

なく、全然反對の意見を吐いた。

京傳は黙つて了つたが、其の後會ふやうな事があつても、決して其の事は口にしなかつた。

或る人に京傳は、馬琴を評してこんな事を言つた。

「俺は馬琴と交際つて、もう彼れこれ二十年にもなるが、近頃あの男の氣韻は益々高くなつた。だがあのまゝ歸る事を忘れたなら、必度世間から棄てられて了ふ。ちやうど山へ登つて頂上から麓は見えねえが、麓から頂上はよく見えるやうなものだ。彼奴も遇には頂上から下りて、麓へ遊びに出かけると可いだが。」

處が、其の人がこれを馬琴に告げた。馬琴は怒るかと思ひの外、にやりくと笑ふのみで答へなかつた。

「どうです。そんな事を言はれても、あなたは腹が立ちませんか。」と強いて聞いた時、

「人々はそれ／＼志がある。他の是とする事が、未だ必ずしも是と決らず、俺の非と言はれる事も、また必ずしも非とは決らない。匹夫にも奪ふ事の出来ないものは其の志だからな。」と言つた。

馬琴は京傳が遊女を女房にして居ることさへも忌み嫌つて居つた。或る時京傳を訪ねると、合憎京傳は天神様に参詣した留守だつた。

「今日はほんたうに合憎でございました、所夫は天神様へ月参りに参りました。」

「あッさう、先日さう聞いて居て迂潤してゐた。」と、馬琴は歸りかけようとすると、百合はそれを引き留めて、



「まあちよつとお宜しいではございませんか、敵の家へ行つても口濕しといふこともございますから。」と、愛想よく迎へ、茶盃盆でもてなした。

「何時も所夫がさう申して居るのでございますよ。お友達の中でも、あなたは筆をおもちになるばかりでなく、世の中の事に何でも通じてお在でなさるから、俺にもしか萬一の事でもあつて、お前一人で分別に及ばぬ事があつたら、あなたに御相談するやうにと……でございませうから本統にお頼りに致して居るのでございますよ。」と言つた。それは決してお世辭ではなく、心からさう考へて、頼りにしようと思つて居たのだつた。

馬琴は、素より快く思つてゐない百合の云ふ事であるから、勿論快い返事を與へる譯がない、そこくにして歸つてしまつた。

#### 四 馬琴の後悔

其の事があつて間もない、文化六年の暮に出版した「夢想兵衛胡蝶物語」といふ本の中に、忠臣藏の淨瑠璃があるが、勘平の女房お輕に托けて、自分の女房と遊女とを同じものゝ様に思ふ者の考へを嘲つてあつた。それは勿論京傳にとつては當てつておもしろいと思はれなかつた。追かの京傳も憤慨して、今度會つたらばと思つて居つた。

處が春になつて、京山と一緒に馬琴の家へ年始に廻つた。其の時端なくも此の事が話題にのほつて、二人の間には今にも殴り合ひが始まらうとした。京山が仲に入つて、其の場は兄の京傳を宥めて別れたが、馬琴も自分が悪かつたと氣がついて、「あゝ自分が悪かつた。芭蕉は自分の弟子のうちに、杜國といふ盲人があつた。そ

れがために一生盲目の句を作らなかつたし、また杉風が聾になると、また聾の句を一切作らなかつたといふが、これは自分の思慮が足りなかつた。舊い友を怒らせてしまつた。慎しむべき事である。」と言つて、大いに後悔したといふ。

其の次ぎに會つた時には、京傳ももう其の事に就ては何も言はないし、馬琴も亦口を鍼して言はなかつたといふが、此處らあたりが、兩人とも凡人でなかつたといふ事を證據立てゝ居る。けれども前に述べた様に、各々志を異にしてゐた二人が、段々遠ざかつて行つたのは、蓋し無理もない事であつた。

馬琴は筆も早かつたが、其の文は亦絶妙で、著はす所實に二百五十餘種、其のうちでも尤も傑出して、今日尙ほ世人の稱讃を博して居るものは八犬傳であつた。一篇成り一篇を刻する毎に、萬本は立ちどころに賣れて行つた。

少年の頃の放縦を悔いた馬琴は、嚴正剛直に身を持して來たが、それは年を老るに隨つて一徹を如へた。たとへ十年の交はりのある友にでも、一言合はぬ事があれば終世其の交はりを絶つといふ風で、言はば自ら求めて孤立の地に立つて居た。さういふ事から、自然肉身に對する愛情は、一層深くなつて行つた。

馬琴の嗣子興繼は、神田同朋町に別居して、醫を業としてゐたが、病氣のために歿つたが、間もなく孫の興邦も病氣になつた。馬琴はそれを憐れむで、子孫のために美田を購はずと言つてゐた彼でも、此の孫のために藏書を賣りはらひ、三百金を投じて武士の株を求めて與つたが、二十五歳でこれまた歿つて了つた。

斯うした不幸はあつても、彼れの著書は益々賣れて、書肆と彫刻師は、日々馬琴の處へ詰めかけて、一枚書けると一枚板にする様にした。それが市に出やうものな

ら、我れも我れもと争ふて購めた。

彼は餘り著述に没頭したためか、七十過ぎて目を患ひ、終ひには殆んど盲となつたので、筆を執る事も出来なくなつた。それでも彼の精力は毫も衰へなかつた。仍で倅興繼の妻は、豫ねて文筆の才があつたので、これに口述して寫さした。彼の有名な八犬傳は、文化十一年に起して、中絶して居たのを、天保十二年に至つて完成したが、少しも代稿の跡を見出す事が出来なかつた。筆を起して其の完成まで、實に二十八年間の長日月を此の爲めに費さしたのだつた。

それから壽藏を小石川深光寺に作り、自ら法諡を撰して、著作堂隱譽簞笠居士と云ひ、また「吾佛記」を著して家に藏した。八犬傳の完成を見た翌年、幕府は更らに新令を發して、風俗を猥る様な稗史小説は、悉く之れを嚴禁して了ふたが、獨り

馬琴のだけは問はれなかつた。

舅の氣に入られた嫁は、姑の氣に入らず、絶えず家庭には風波が起つた。けれども嫁の木村氏も、五十餘りで歿つた。馬琴はそのために精力はあつても、著作をつづける事が出来なくなつた。深光寺に壽藏を構へたのは其の後だつた。

馬琴は嘉永元年十一月、八十二歳の高齡を保ち、眠るが如く黄泉に旅立つた。

## 英蝶

## 一 三宅島へ流謫

一蝶は浪華の人で、姓は多賀氏、父は伯庵と云つて、元某藩の醫であつたが、一蝶が十五歳の時に、一蝶を伴つて江戸に出て、吳服町の新道に居住して居た。

一蝶は書を狩野安信について學び、狩野信香と稱して居たが、後師の氏を返して多賀長湖とあらため、後また英一蝶と改めた。

一蝶の畫は、山水人物に最も傑出したものがあつた。性來風流を好んでゐたので、其の交はる友もなか／＼多かつた。書家の佐文山、佐玄龍、俳家では芭蕉、其角、嵐雪、通客では紀文などがあつた。それがために、畫風にも自然俳味を帯びてゐて、

別に一家の風を成して居た。

鳥羽作正以後、風韻掬すべきものは一蝶の畫であつたと言つて讃められ、またあるものは、浮世繪の部を脱し得ないものだと罵るものもあつたが、後者の如き評は、多くは彼の名聲を猜んで言つた事で、たしがに群を抜いて居た。

或る時、彼は佛師村田民部と圖つて、戯れに當世百人一首一卷を著はしたが、それが當時の政道を誹謗したものだといふ理由の下に、三宅島に流される事になつた。前の理由は表面で、實は上臈舟遊の圖に擬へて、將軍綱吉の韻事を描いたのが、幕府の忌諱に觸れる大なる原因であつたのだ。

「何時まで経つても名残りは盡きぬ。もうお別れ致さねばならぬ。唯だ先刻よりお願ひ申した通り、母の身の上は呉れ呉れもおたのみ申します。」

彼は愈々船出に臨んで、送つて来て呉れた多くの友人のうち、殊に親しかつた横谷宗珉に斯う云つた。

「御安心あれ。御尊母の事は、宗珉しかとお引き受け申した。それよりも、氣候風土、水食物の異つた地に行かれるのぢや、随分ともに身體を大切にして、一日も早く御赦免の日を、一同待つて居りますぞ。」と言つて、宗珉は慰め、且つ注意した。

「いや、皆さんの御厚志は、一蝶死すとも忘却は致しません。便りと申しましても思ふに任せぬ浪の上、とても都度は叶ひますまい。聞けば江戸へ来る鱈の干物は、島の名物といふこと、若しも其の干物の籠に、笹の葉が挿してあるのを御覽にでもなつたら、一蝶が未だ生きてゐるものと思つて下さい。」

一蝶の眼から、はら／＼と涙がはふり落ちた。

やがて此の流人に乗せた船は出帆した。それは元禄十一年師走二日、肌をつんざくやうな寒風が吹く日であつた。

## 二 涙ぐましい程の孝心

彼は、其の性磊落豪放であつたが、一面非常に孝心深い男であつた。三宅島に流謫されるについても、第一に心にかゝるのは母の事だつた。それで、宗珉に留守中の母の身の上を、呉れ呉れも頼んだ。彼が船出の際涙を流したのは、残して行く母の事を氣遣ふのと、多くの友の情を感じてだつた。

島の謫所は阿古邑といふ處にあつたが、晨に夕に、其の友とするものは、風の音と波の響のみであつた。懐かしい母の住む江戸は、恰かも其所から北に當つてゐた

ので、常に北に面した窓を開けて、はるかに浪狂ふ海の彼方を望んで、母の身を懐ふのだつた。彼ば島の此の謫所を北窓庵と名づけた。

「オイ、見な、あの畫の先生が、また海ばかり見てござらつしやるぜ。」なるほど、だが、今度の江戸の便りを知んなさるめえから、さういつといてやるべえよ」「さうだ、先生、畫の先生様ア……。」

漁師たちはがや／＼話しながらやつて來たが、窓近くなるとかう呼んだ。

「やあ、漁師衆か、相變らず精が出るな。」「へい、有り難ふムいます。時に先生様、また近いうちに江戸へ船が出ますぞう。」「左様か、忝じけない。又例によつて頼まれて呉れよ。」「ようがすとも、其の代りまた何か描いて下されよ。」「は、は、は、俺見たやうなもの、畫でよかつたら、いくらでも描いて上げよう。」

彼は弱者に對つては、非常に優しい親しみを持つて居つた。無智な漁師たちには、勿論其の巧拙は判らないが、繪の先生だといふのを珍らしい事に思つて、何かと親切に用を達して呉れるのだつた。

母思ひの彼は、謫所にあつても常に母親のために繪を描いて、それを江戸への便船毎に漁師たちにたのみ、江戸へ送つて母親の衣食の料に充てて居つた。

彼は島に流されて、畫を描くの困つたのは繪具であつた。それがためには、彼は石だの、土だの、或ひは木の皮草の葉などを、いろ／＼に研究して、それから繪具を採ることに苦心した。此の時分の畫は「島の一蝶」として、後日特に世人に珍重された。

「島の一蝶」、それについて今一つの説が傳へられて居る。それは一蝶が島にある

間に、島の女と關係して、一人の子を儲けた。それが成人して後江戸に出て一蝶と號して畫を描いた。其の技は非凡であつたが、如何にも其の人格が野卑であつたために用ひられず、幾干もなく島に歸つたが、これを「島の一蝶」だと言ふのであるが、如何にも拵へ事のやうで、事實とは受取れない。茲にはどうしても前者の方を正しいと認めたい。

一蝶が島に流されたのは、彼が四十七歳の年であつたが、それから足かけ十二年、即ち五十八歳まで、島に孤獨の生活を送つた。彼は江戸に送らるゝ干魚の籠に、自分が生きて居るといふことを、唯れか知つて呉れるやうにと、船出の時に言つて置いたやうに、笹の葉を挿した。それが江戸に行つて、知己の人々に發見されて、それからそれと傳へられて、涙の種となつたのも、實に久しい間であつた。

### 三 赦免の喜びと逸話

「先生様、お喜びなされませ。御赦免の船が着きましたぞ。」

彼は今日も南の窓から、秋晴れの空の下、森々たる海面を眺めて、江戸戀しの情に涙ぐむ時、斯う言つて一人の漁師が慌ただしく彼の窓下に馳せよつた。

彼は赦免の船によつて、親しむ島人に別れ、再び懐しの江戸に歸ることが出来た。それは寶永六年九月であつた。彼が知己との再會には、言葉もなく、たゞ堅く手を握つて、互ひに涙を流すのみであつた。

彼は母に優しい一面に於て、また一宵に千金を抛つほどのな、豪華な遊びをする様な事もあつた。それは紀文等の潤達に見馴れたところもあつた。

或る豪駝師の店に、古びた石燈籠があつた。それが頗る珍奇だといふので、某々

の大名たちが、争つて之れを購めようとしてゐるといふ事を耳にした。すると早速彼は出かけて行つて、争つてゐる大名たちよりも、ずつと高値に買った。勿論それがためには家財を傾けた。珍奇な此の古びた石燈籠は、狭い庭のうちに移された。折しも初夏の事で、

「初茄子でござい。さア茄子の走りでござい。」と言つた、八百屋は自慢氣に賣りに來たが、何れも其の價が高いといつて、誰れ一人買ふものがなかつた。一蝶はそれを悉く買はせ、半分は漬け、半分は鳴焼にせよと命じた。

狭い庭には打水涼しく、彼は椽側に夕餉の膳を運ばせ、例の燈籠に火を入れさせると、愉快に堪えぬ面色で盃を取り上げた。膳には茄子の鳴焼と、新漬の茄子の二品よりなかつた。

「お申し付けではござりましたが、これでは餘り何でござりますから、何か取らせませうか。」

酌をする家人がかう言つた。

「否や、これで結構々々。走りの茄子を喰ふて、かうして石燈籠を眺める。天下にこれほどの贅澤があらうか。」と言ひつゝ盃の滿を引いた。

一蝶の女達摩の像は有名なもので、緋の衣を着て、跣座を結んだ女人の畫は、彼が書き初めたのだつた。その起因は、某妓に需められて、洒落半分に描いたのだつたが、それが非常に評判がよかつたので、人々は争つてこれを需めたので、彼も快く描いて與へた。

一蝶は晩年癡癡し長湖(或ひは朝湖とも書く)と號した。若い時分から大酒を飲



んだ所爲か、後には筆を持つ手が震えるやうになつた。月を描くのに、ぶん廻しを用ひたことがあつたが、それでさへ思ふやうにならなかつたとて、

おのづからいざよふ月のぶん廻し

と句を詠んだ事もある。

一蝶は隆達節が巧かつた。自作の新譜なども多數あつた。今其のうちの一つを擧げて見ると、

「あだし仇浪、よせてはかへる浪、淺妻舟のあさましや、あゝまたの日は、誰に契を交しているを、枕はづし、偽りがちなる我が床、山、よしそれとても世の中……。」

と、彼は酔ふと必ず中音に歌ひ出した。中にも「淺妻舟」は最も人口に膾炙してゐ

た。

一蝶は享保九年正月十三日、七十三歳で歿つたが、謚名は「英受院一蝶日意居士」遺骸は芝區一本榎承敬寺地中顯乘院に葬つた。

## 白隠禪師

## 一 説教を聴いて胸を痛めた

駿州駿東郡浮鳥原宿、杉山氏の三子に岩太郎といふのがあつた。此の岩太郎こそ、後に高僧白隠禪師となつた其の人であつた。母長澤氏は、或る夜うとくと結ぶ假寝の夢に、衣冠正しい一人の神官が、伊勢大神宮の御符帯びて、はるく伊勢から来て、自分の家の棟に停つたが、其の姿には犯すべからざる凛々しさがあつたので、はつと思ふ間に夢は覺めたが、其の時から懐胎した。そして此の母が十月十日の苦勞も過ぎて、貞享二年乙丑の十二月二十五日の夜、丑の日の丑の刻、満ち来る潮ともろ共に、勇ましい孤々の聲を擧げた。白隠名は慧鶴(慧一に又は恵に作る)

其の母は長澤氏であつた。

杉山氏は鈴木氏の一族である。鈴木三郎重家は、源義經に従つて武勳を抽んで居たが、幾何もなく義經が都を落ちて、奥州へ下向したといふことを後で聞いて、最後まで御供をしようと、一族七騎と共に其の跡を追つたが、所詮及び難いと知つたので、時節の到来を待たうと、一族と共に伊豆江梨の里に隠れたものである。更らに其の先に遡ると、熊野権現の臣神であつて、世に熊野侍と稱されて居つた。斯うして幾百年來、流れ流れて來た此の血を受けた白隠の氣象は、自ら穎異勇悍、豪邁果斷であつたのは、決して不思議ではなかつたのだ。

白隠が十一歳の時であつた。母に伴れられて村の昌源寺へ參詣した。

ところが、あたかも日嚴上人が「摩訶止觀」を講義して、其の第一卷で十種の發

心を説いた第一の地獄心に及んで、

貪慾と嗔恚と愚癡との三つが、段々増長して來ると、殺生、偷盜、邪淫、兩舌、綺語、妄語、貪慾、瞋恚、邪見と云ふやうな、悪い行ひをするやうになり、且つ又歴然として私無き因果の道理をも信じないで、心に少くも慚愧と云ふことを知らず、現在で悪いことをすれば、必ず未來に業報が來るといふことも信じない。従つて尊い佛様の教誡には少しも従はないといふ、極惡無智の輩は、遂ひに怖ろしい地獄に落ちなければならぬ。

その地獄には、八寒八熱、さては火の車や劍の山や、火焰り、釜熬り、鋸挽き、罪に従つて責める數々は一百三十六あるぞよ。

と、身の毛も慄立つやうな、怖ろしい苦患を細々と説いた。

此の説教をはじめて聞いた白隠は、まだ遊び盛りの子供であつたが、愕然とおどろいた。懼然として恐れ戦いた。考へて見ると、自分は常に殺生を好み、蜂や蜻蛉や蟹、蛙や鳥や獸などの命をとつた事は數限りもないほどである。ああ、して見ると自分はやがて怖ろしい地獄とやらの苦患を受けなければならぬのかと、そぞろに小さい胸を痛めるのであつた。

## 二 天神様を信仰

或る日の事だつた。白隠は母と一緒に風呂に入つた。處が母は至つて熱湯が好きだつたので、下から火をドン／＼燃した。すると湯は煮えくり返る様に沸いて、熱氣は箭のやうに肌を刺し出した。と思ふと白隠は、わアツと浴槽の籠も破れんばかりに泣き出した。

白隠の泣き聲を聞いて、家人はどうした事かと馳けつけた。そして色々に慰めたが、容易に黙らない。時に母は色を作して、

「女見たいに、そんな弱いことで怎うする？」と叱りつけた。

凜として冒すべからざるうちに、また無限の愛の籠つた一言に、流石の白隠もバツタリ泣き止んで了つた。さうして、

「何故泣くのだえ？」

と問はれた時、

「地獄が恐ろしい。今お母さんと一緒に風呂に入つてゐても、あんなに恐ろしいのに、若し自分一人で地獄へ落ちたならば、どんなに恐ろしいかと思ひ出して、あんなに泣いたのでございます。」と答へた。

それを聞いた母親は、「そんなに泣かなくともよい。いくらも恐ろしくないやうに出来るから……。」と言つて慰めた。白隠ははじめて安心したものか、今まで面を蔽ふてゐた、愁の雲は忽ち齎れて了つた。

翌日、白隠は何時もの様に遊びに出て居たが、ふと、また地獄の事を思ひ出した。昨日は母に慰められて、一時安心したやうなもの、考へて見れば見るほど、何となくまた心配でならなかつた。もう一度よく聽いて見よう、さう思ふと矢も楯も堪らなくなつて、家路をさして駆け戻つたが、合憎客が來てゐて、聽く事が出来なかつた。

伶俐な白隠は、ふと思ひ出したやうに、「お母さん、何卒髪結ふて下さい。」と言つた。母はもう日暮れ方だといふに、髪結ふて呉れとは珍らしい事と思ひながら、微

笑を湛へて、

「さうかえ、どれどれ結ぶて進ませませう。」と云つて、明るい縁側へ連れて行つた。

そして、母は白隠の髪を結はうとすると、白隠は母の手を確かと握つた。

「お母さま！」「何です？」「と見下した母の顔を見上げて、

「さアお母様、地獄の苦患を免れる道を教へて下さい！」と言つた。母は驚いて、

「まアお前とした事が性急な、今髪を結ぶて了ふたら、ゆつくり話して聴かせませ

う！」「否えく、それ聴かしてから、髪を結ぶて下さい、あの怖ろしい地獄の苦患

を、どうしたら免れることが出来るか、それを教へて下さらねば、死んでも此の手

は放しませぬ。」と、堅い決心の色をあらはした。

母は當惑して了つた。そして何と答へて好いか分らなかつたので、黙つて居ると

白隠は子供ながらも怫然として怒つて、「お母様、あなたは其の様な事を云ふて、私をお瞞しになるのですか。」と云ふなり、ワツと其の場に泣き伏して了つた。

「あゝ教へて上げます。教へて上げます。」と、母は漸く諭し慰めて、「お前がそれほ

ど迄に思ふなら、一心籠めて西念寺の天神様へお参詣を爲さい。天神様は屹度お助

け下さるに違ひない。それにお前は丑年で、生れた月日もみな丑ぢや。丑は天神様

のお使いと云ふから、これから一心に天神様を信心しなさい。」と言はれたので、白

隠はやつと母の手を放して、それからは一心不亂に天神様を信仰した。

### 三 白隠の無常觀

白隠を幼い折から、敬虔なる信仰に導いたのは即ち其の母であつた。此の母はこ

れから後、白隠が三十歳で美濃の瑞雲寺に馬翁に参じ「禪關策進」に大勇猛心を奮起

して、寶永元年五月二十七日に亡くなつた。白隠はどんなに慟哭したであらう？  
 どんなに寂寥を感じたであらう？ 然しながら、母の死は其の修行地の上に、非常  
 な鞭撻、策勵を與へた事は言ふ迄もない。其の後、寶曆三年に、亡母の五十回忌を  
 迎へた白隠は、岡崎大侯隠君の侍側の需めに應じて、法語「藪柑子」一篇を認めて、  
 昨五月二十七日は、愚母五十年の遠忌に相當候へば、追善の爲め何をかなと考  
 へ見合せ給へども、誦經書寫禮拜恭敬等の佛事も老來叶ひがたく侍れば、是を  
 幸ひに貴姉日頃御所望の法話一篇を認めて、法施供養の一助とも罷成らば何よ  
 りの追福ぞと、廿五日の暮方より取りかゝり、同じ廿六日の夜半過ぎ迄に清  
 書致し、翌朝牌前へ手向け申候。處々落字等も多く、文字の顛倒も間々相見え  
 候へども、吃度邇覺致し候。管々しき拙語、他見は憚り入り候へども、近侍の

人々には内々にて御讀み爲聞被成候へば法施にも罷り成るべく、是亦菩薩行の  
 手習ひなるぞと思ひて、時々御讀み可被成候(下略)。

と書いた。一讀七十の老叟の雙眼に、なほ熱い涙が光つて居るのを、今眼のあたり  
 に見るやうである。白隠は天地の間に、此の母を慕ふて、幾度か法衣の袖を絞つた  
 ことであらう？

白隠は幼い折から、骨格逞ましかつたが、どうしたものか、三歳の折まで能う起  
 つ事が出来なかつた。素より利かぬ氣の白隠の事だから、早く起たう、早く起たう  
 と、頻りに稽古をして居た。

處が或る日の事、何時もの様に起つ事を習つて居ると、ヒョッコリ起てた。「あッ、  
 起つた！」と思はずかう叫んだ。それを見た一人の男は、「あつ、岩様が起つた！」

と叫んで、驚喜のあまり、家内中に吹聴して廻つた。白隠は幾歳になつても、其の時の喜悅を忘れなかつた。

四歳の折に、小夜の中山の歌を聴き覺えに覺えて、而もそれをよく暗誦しては遊びに行つた先々で無邪氣に謳つて居たが、それを少しも間違へなかつたので、之れを聴く人々は、何れも「伶俐な子供だ」と云つて、頻りに感心した。

五歳の折であつた。小婢たちに伴はれて、程遠からぬ濱邊へ遊びに行つた。翠したたる様な磯馴松の下に、沙を洗ふ男波女波に戯むれて、貝だの小石などを拾ふて、皆な嬉々として時の過ぐるも知らなかつた。

處が白隠は、何時の間にか其の群を離れて、獨り靜かな濱邊に坐つて、涼しい眼を、遙かに飛ぶ鷗の影を追ふて、果涯も知れぬ沖の方に放つてゐた。白隠は行く雲、

消ゆる雲、現はるゝ雲、變現興沒、暫らくも止む時のない光景を眺めて居たが、其の瞬間「どうも不思議ぢやなア……。」と、電の如く心に感じた。さうして、世は無情である。あたかも此の雲の變現興沒極りないやうに、世は總て變現極まりがないのが。實に一瞬一刻に、大安心の時とはないのだ。眞に果敢ないものだ。而も人も我もその果敢ない無情の荅に立つて居るのである。かういふ世に何の樂しみがあるか。」と、心に深く哀しんだ。

他日、宗門を覆蔭する白隠が法材の芽は、實に此の時苗いたのだつた。此の無常觀こそ、彼が佛教入門の第一歩であつた。白隠は之れを教へられず、導かれもせず、自ら豁然として悟つたのである。故にそれが徹底して居る。白隠は無常觀に依つて、其の信仰の門を敲き、且つこれを開いたのだつた。

白隠はかの「於仁安佐美」の中にも、頻りに此の無常觀を説いて曰く、

昔、悉達太子は、五印度の主、淨飯大王の御子にておはしけれども、深く世の無情を恐れさせ玉ひ、十九歳にて耶輸多羅俱夷女等の美夫人達を見捨てさせ給ひ、夜半に王宮を忍び出で、仙人の奴とならせ玉ひ、あらぬさまなる艱辛を歴させ玉ひしも、皆是れ生死旋火の苦輪を恐れさせ給ふ故ならずや。華山の法王の如きは、無常の殺鬼は萬乗の君をも恐れ奉らぬ事を、かねて知ろしめされけるにや、十善帝位をふりすてさせ玉ひ、勿體なくも玉體を乞食法師の身にやつさせ玉ひ、那智熊野などいへる恐ろしき山路を召しも習はぬ御草鞋に御足は切れ損じ、染めぬ草木もなかりけりなど、今の世までも語り傳ふ。

と説き、次ぎに中將姫、光明皇后、千代女、窓春尼、藤房卿などの得道の因縁を

説き、更らにまた、

刈萱重氏は、筑後、筑前、肥後、肥前、大隅、薩摩、六ヶ國の大將なりけるが、櫻の花の敢りて盃に入りたるを見て、夢幻空華の現を觀じ、憂別離苦をも悟り了りて却て愛し怨憎會苦をも悟り了りて却て憎むと、獨言して妻子をすて入道し、高野の山に入りて行ひすまじき。四黨の旗頭、熊谷の庄司次郎眞實と云ひし武士は、人々にも恐れられたる無雙の勇士なりけるが、一の谷の合戦に、源平の目を驚かす働して、敵米方の膽を冷やし、拔群の軍功を顯はしたりけれど、敦盛の最後を忘れかね、阿育が七寶も壽命を買ふ事なく、須達が十徳も無常を免かるゝ事能はずと言つて黒谷に入り、入道して蓮生坊と名乗り、目出度く行ひおはせたり。有爲轉變の火宅の荳に、夢幻空華の身を宿して、本の露、末



の雲にも劣りながら、萬戸の富も何にかせん。(下略)  
と謂つて居るが、茲に敬虔なる白隠の信仰があるのだ。而して此の無常觀は、白隠が生涯を通じて變る事がなかつた。

#### 四 專念行者に教へらる

其の頃原の宿に、專念行者と云ふのが居つた。何處のものとも知れないが、初め神谷の圓城寺に百年程も住んでゐた。其の後、小田原の長興山にのほつて黄檗鐵牛禪師に參じ、後また元山中村に五六十年も居たと云ふが、近頃はまた浮島が原へ來て居つた。そして常に尺八を吹いて、ちよつと何處から見ても、狂氣坊主のやうであつた。或ひはまた、此の行者は源義經の臣で、義經と共に奥州に落ちた常陸坊海存である。高館に破れてから仙術を修得して、何處ともなく山野の間に棲んで

居つたのだとも言ひ傳へられてゐた。何れにしても、自らそなはつた氣高い骨格と氣品を有つてゐて、なるほど仙人かと思はれるやうな神變不可思議な事が間にあつた。従つて多く信仰を集めてゐた。

白隠の家でも、父が此の仙人を信仰して、何時も家に請じては供養して居つた。仙人を請する時は、親戚知己をあまた招くのだつた。其の中に交つてゐる白隠を見て、行者は「坊！坊！此處へ來い！此處へ！」と云つて、自分の側に招いて坐らせ、決して俗人と一所に置かないやうにした。白隠が側に來ると、大きな手を伸べて、白隠の背中を撫でつゝ、「お前は人相が誠に善い。屹度偉ひ坊さんになれるぞ。お釋迦様は雪山で六年の難行苦行を遊ばされた。達摩大師も亦少林山で九年の間、面壁坐禪をなされた。お釋迦様や達摩大師ですらさうぢや。偉い人とならうと思つ

たら、精出して修行せねばならぬ。」と言ひ聽かせた。

此の行者はある時、まだ幼い白隠に、次ぎのやうな三つの養生秘訣を授けた。

一、食汁の餘りは棄てるな。必ず湯を加して呑め。

二、蹲踞んで尿せよ。決して立つて放てはならぬ。

三、北の方へ大便したり脚を向けてはならぬ。

そして此の三つさへ能く守れば、必ず長命が出来るかと教へた。故に白隠は終生これを固く守つて、決して破らなかつた。此の行者の養生秘訣は「夜船閑話」にも記されて居る位である。

##### 五 一刀を提けて河を渡る

賢良な母の教訓によつて、白隠が敬虔な天神信仰を有つて、偉大な信念と勇猛な

氣象とを具へたのは、實に彼が十一歳の時であつた。

白隠は、毎日丑時から起きては天神經を誦じ、焼香禮拜しては地獄の苦患を免かれさせ給へと祈願するのだつた。

ところが、父は彼れの心も知らず、

「此のやくざ者奴が、毎晩夜半に起きては、油ばかり無駄使いしてどうする。第一子供の癖に、お経なんか讀んで……。」と言つて叱つた。すると母は傍らから、「まあ其の様にお叱り遊ばしますな。あなたが御信心遊ばされぬ其の上に、子供の信心まで邪魔なさつては……。」と有めて、白隠の幼い信仰を止めさせなかつた。

其の頃子供たちの遊び道具に、滑箭といふものが盛んに流行して居た。腕白盛りの白隠は夫れを射ては遊んでゐた。或る日の事に家人の眼を偷んで、夫れを持つて

座敷で一人遊んで居つた。ところが唐紙に菊の紋があつたので、これが何より屈強の的だ、一矢に見ん事射貫いて見ようと、小弓を満月と引きしほつて、狙ひを定めてハツシと放つた。

ところが、狙ひは外れて彼方の床に當つた。床には兄が秘藏の柳滑の筆になつた柳蔭の西行の軸が掛つて居つた。箭は其の軸の西行の左の眼を射貫いた。白隠は「しまつたッ」と思つたが、今更ら何とも致し方がない。「南無や天満大自在天神、大慈不可思議の力によつて、只今の落度を露知らぬよう守らせ給へ！」と云つて、一心不亂に念じたが、それは無理な注文だつた。素より射貫いた眼が元のやうにならう譯がない。そのうちに兄は外から歸つて來た。そして忽ちそれを見出すと、兄は大いに怒つて、唐突軸を外すや否や、母の前へそれを突きつけて、「あのやくざ者の

悪戯を御覽なさい！」と言ひ棄て、又其のまゝ外へ出て行つてしまつた。

母は軸をじつと見詰めたまゝ、何とも言はなかつた。白隠はどんなに叱られるか知れないと思つてゐるが、黙つて居られるので、叱られるよりもなほ辛かつた。辛いと思いつめると、天神様が恨めしかつた。それとともに、また焦熱地獄の苦患がそぞろに恐ろしくなつて來た。

或る日の事であつた。白隠は天神の畫像の前に香を焼いて、禮拜して「私の祈願を満足せしめ給ふならば、何卒此の香の煙を眞直ぐに立ちのほらしめ給へ。」と一心不亂に念じて、ややしばらくして、眼を開いた見ると、一縷の香の煙は眞直ぐに立ちのほつて居つたので、

「あゝ、我が心願成就すべし。」と、飛び立つほど悦んだが、一陣の風がバツと吹く

と同時に、煙は左右に立ちのぼつた。

「あゝ、應障遂に免かるべからざるか。」と、白隠は茫然自失した。

天神の畫像の前に焚いた香の煙が、風に吹かれてゆらくと動いたと同時に、彼白隠の心も妙からず動揺した。而して、如何したならば地獄の苦患を免れることが出来るかと、小さな胸を痛めるのだつた。

折柄、觀世音菩薩が、普門示現の利益、廣大無邊なことを聽いた。それは白隠にとつては、あたかも暗夜に燈火を得たやうなものだつた。彼は其の日から、忽ち觀音の信者となつて、普門品を讀みはじめた。

ちやうど其の頃の事であつた。村の祭禮があつて、練人形が來た。其の外題は「日進の鍋かぶり」といふので、日蓮上人の弟子日進が、鎌倉の執權北條時宗の前へ

召し出されて、鞫問される處であつた。

役人は日進に問ふて、「法華の行者は、火に入つても焼けず、水に入つても溺れずと云ふが、まさにそれに相違ないか。」と言つた。其の胸には信仰の火を燃してゐる日進の事だから、素より迫害も壓制も屁とも思はない。「如何にも左様でござる。」と答へた。

其の設然たる一言を、何等信仰ない役人共は、却つて心悪く思つたので、「然らば試して見ん。」と、鍬を眞赤に焼いて、「さあこれを股に挟め！」といつて、いきなりそれを日進の服に挟んだ。けれども日進は自若として、顔色一つ變へなかつた。それではといふので、今は火花の散る様に焼けた鍋を、日進の頭上に冠らせたが、而かもなほ日進は自若として、題目を唱へて居つた。

これを眼のあたりに見た面々は、はじめて法華の威徳に感じて、思はず南無妙法蓮華經と唱へた。

此の壯烈な一幕を見て、信仰に飢えたやうな白隠の心は大いに動いた。あゝ尊いかな法華の行者。これだこれだ。自分の願ふところは之れだと、冒し難い決心の色を現はした。

白隠は家に歸つたが、「我れも亦た法華の行者である。」と、眞赤に焼けた火箸を股の間に挟んだ。けれども、線人形の日進ならぬ白隠、何かは以て堪るべき、忽ち皮膚は焦だれた。白隠は茫然として力を失つた。晨には天神様の感徳なく、今亦觀世音菩薩の功德もない。然らば自分は、如何して恐ろしい地獄の苦患を脱れる事が出来よう。

白隠は斯うして毎日毎晩、地獄の苦患を脱れることのみに心を痛めて居つたが、或る時偶とこれは、出家解脱の淨界でなければ、到底此の自在の身を得る事は出来ぬと。遣る瀬ない小さい心に思ふた。而して父母の前に出て、改めて出家を乞ふたのは、白隠が十二歳の時であつたが、其の父母は白隠を宥めつ賺しつしてこれを許さなかつた。

けれども、彼が解脱を求める心は、正に火の如く焰え立つた。遂ひに柳澤山に登つて、寒流石上に一箇の修練場を求めた。聳り立つ巖面に、鑿を以て自ら觀世音菩薩の像を刻んで、「此處こそ我の解脱の道場だ。」と云つて、毎日此處へ來ては安坐し、金剛經、普門品、大悲咒などを讀み、猛然と修練をつづけるのだつた。

或る日、三里ばかりを隔てた親戚へ行つたが、生憎降りつゞく雨のため、思はず

三四日逗留した。白隠は「こんな事に愚圖々々してはゐられない。歸らう。」と言ひ出した。親戚のものは驚いて、「此の雨に、どうして歸らうぞ。」と言つて引き留めたが、一旦斯うと言ひ出したら肯かぬ白隠の事、留めるのを振り切つて、降りしきる雨の中を歸つた。

白隠がさしかゝる河は、大降雨のために氾濫してゐた。而しそれしきの事に驚くやうな彼ではなかつた。忽ち素ツ裸體となつて、衣服は肩にかけ、短かい旅双をスラリト引き抜き、これを提げて激流の中を渡つた。後で人が「どうして刀を提げて渡つたか？」と訊ねた時、白隠は「水の出た時などは、魔物が出ると聞いて居たら、若しそんなものでも出て來たら、一刀の下に斬り捨てゝやらうと思つてゐた。」と答へたといふが、この一事を見ても、白隠が幼い時から、如何に豪邁勇悍の氣象

を有して居つたかといふことが分るのである。

### 六 大暴風の中を大解

一たび出家解脱の淨界を欣求してから後、白隠の眼には何ものも見えなかつた。耳には何ものも聞えなかつた。朝に夕に、只だ心に出家！出家！これと呼ぶのみであつた。そして、再三父母に向つて此の事を頼んだ。兩親も白隠の切なる望みに黙し難く、遂ひにこれを許した。それは愛と力との父母も、到底其の志を奪ふ事は難かしいと覺つたからだつた。

時は元祿十二年、白隠が十五歳の春、軒端の梅も綻びる二月二十五日、而も天満天神の命日に、原宿の松蔭寺へ入つて、單嶺和尚を師とし、「流轉三界中。恩愛不能斷。喜恩入無爲。眞實報恩者。」と唱へつゝ、緑の黒髪を剃りこぼち、岩次郎の名も

棄て、即ち慧鶴と呼ぶ、青道心となつたのである。

師匠の單嶺和尚は、天性自ら大廣で、越格の氣量を有つた宗師家であつた。白隠が剃髪した時に「良い坊さまになれよ。」と言つたが、確かに單嶺も頂門に一雙眼を具へた衲僧であつた。此の時早くも白隠が、宗門擧揚の大器だといふ事を看破したのだつた。けれども惜しい事には、越えて二年、白隠が十七歳の正月、此の蛟龍の天に昇るのを見ずに遷化した。

白隠は剃髪の日、「肉身にして火も焼くこと能はず、水も漂はすこと能はざる人たらずんば、設ひ死すとも休まぬと、心に堅く誓ひ、難行苦行の後、諸方に周遊して諸老を問ひ参問至切、越後の英巖寺に到つて日夕端坐見性につとめて居たが、此處に省覺する所があつた。時に白隠二十四歳、後ち宗格禪人によつて、信州飯山の

正受端公に見え、機鋒交觸豁然超悟する處があつた。後原宿に歸つて蔭松寺に住し、華園第一坐の職に就いた。そして法を鮮承公に嗣ぐ、時に白隠三十一歳。名僧の名海内に高く、参請の徒庵を村内に結んで敬居するものが、常に百餘人を下らなかつたといふ。

白隠が雲水の旅に上り、伊豫から海を渡つて福山の正壽寺に到り、正宗鑽會を終へ、そして五年振りに懐かしい故郷に歸らうと、五六人の伴と共に東の方に志した。

旅は道伴れ、世は情、次ぎから次ぎへと交る名所を話の友、幾つかの宿を重ねたが、白隠は獨り「狗子佛性の話」に参じつゝ、道中にありながらも、一刻だに油断することになかつた。斯うして着いたのは備前の岡山であつた。

岡山は池田氏三十五萬石の城下、其の城樓の壯麗は山陽屈指で、而も朝日山や兒島灣、繪のやうな山水がある。伴のものは、「どうぢや、貴僧も見物して行かつしやつては……。」と勧めたが、白隠は「我道未だ成らず、名所などを見物して楽しんでる閑はない。」と言つて、目を瞑つて見なかつた。

次いで播州路に差しかゝつて、或る山寺に泊つた。見性の外に餘念ない白隠は、兀然として面壁端坐した。夜は静かに、天は冴へ、潺湲として瀧ぐ溪聲が凄まじかつた。白隠は其の聲を聞きつゝ、心は次第に冴へて、鋭い針の如くなつた瞬間、忽ち一偈を打した。曰く、

山下有流水。 滾滾無止時。

禪心若如是。

見性豈其遲。

と。白隠は水の如く止む時なく、倍す精進して速かに見性しやうと誓つた。

翌日、伴のものと共に此處を立つて、明石、須磨、舞子と、講の中のやうな路を歩いた。すると偶ま一人の友が、氣分が悪いといふので、白隠は其の男の荷物を自分で負ふてやつた。そして暫らく行くと、また一人が、「私は非常に疲れた。師兄は立派な身體だ。どんなものぢやらう。助けて頂けんかな。」と言つた。白隠は平氣で「持つて進ぜよう。」と言つて、平氣で其の男の荷も負ふてやつた。自分のものと合せて三人前の荷を持つてゐるが、心のうちには、「少しばかりの功德によつて、早く見性が出来るやうに。」ひそかに念じ、猶ほ「狗子の話」に參じながら、草鞋を踏みしめて歩いて兵庫に來た。

此處から舟で桑名へ行く事になつた。他の伴のものは、舩に碎くる金波銀波の美



しさに、乗り合せた人々と面白く談笑してゐたが、白隠のみは過分な努力に思ひの外勞れたので、珍らしい世間話などを聞きながら、ぐつすりと寝込んでしまつた。やがて白隠が、大きな欠伸をしながら眼を覺して見ると、舟はまだ動かないで港に在つたので、「おやつ。」と驚いて、「もう拙僧は随分寝たと思つたが……。」と怪訝な顔をしながら、「もしく船頭さん。舟はまだ出ませんかな。」と訊くと、「何だと此の寝ほけ坊主奴、昨夜少し沖に出ると、俄かの暴風雨で、一緒に出た十艘ばかりの船は、大方難船して終つたんだが、幸い金昆羅様の御蔭で助かつたな。此の舟ばかりだ。」と言はれて、白隠も初めて驚き、傍を見ると、成るほど他の伴のものや乗合の人々は、何れも顔蒼腿めて、嘔吐に鼻持ちもならぬ位であつた。

白隠は覺えず合掌作禮して、念じて曰く、「諸天善神の御擁護に依り、其の苦痛を

知らずに過した。これも亦昨日、人の荷を負んでやつた陰徳の陽報ぢや。」と、深く自ら信じて喜んだ。白隠が安住不動の大禪定力のあつたことが知れる。

### 七 白隠の酒脱

白隠が松蔭寺に歸坐してから四十餘年、常に宗門の改革を獅子吼して居つたが、江戸の醫者半田氏の請に應じ、七十五歳の老軀を提けて、箱根の嶮を越え、初めて江戸に入つた。それは寶曆九年七月、九代將軍家重が將軍職を辭する前年の事であつた。

江戸は言ふ迄もなく將軍の城下である。此處で一つ自分の理想を實現したいと、大きな抱負を有つて來たのだつた。そして深川引籠町の臨川寺といふ寺へ入つた。「白隠禪師來る。」の聲は、江戸八百八町をかした。ところが白隠が江戸も場末の

深川の臨川寺に入つたと聞いて、兎や角の噂となり、  
名僧をひつこみ町の臨門寺

藪の中にも香のものかな

といふ落首を作つたものがあつて、それがまた人々の口にされるところとなつた。

「藪の中にも香の物」といふ諺は、謙倉時代からあつたもので、其の出所は支那である。魏の青龍二年に、司馬懿が葛諸亮（孔明）と謂南といふ處で對陣してゐた時、司馬懿が文帝に上表して決戦を請ふた。此の表文中に「豈知野夫有二功者一也。」とある。これが爲めに轉訛して「塵溜の中の鶴」と云ふ意に用ひられた。

白隠は此寺に在つて「碧巖集」を提唱して、盛んに家風を宣揚して居たが、道譽自から高く、諸方の歸仰を受けた。

白隠は或る日、時の寺社奉行小出侯を訪づれた。侯は名を秀持と云ひ、丹波園部の城主であつたが、去る延享三年に寺社奉行を兼ねたのである。白隠は一度訪ねて見たいノ、と思つて居たが、段々に遅れて、其の日訪れたのであるが、生憎其の日は他出であつた。そこで白隠は請ぜらるゝまゝに、書院に通つて暫時待つて居つた。其處へ家臣の一人が来て、「是非一筆御揮毫下さるやうに。」と言つて、立派な金屏風を出した。白隠は軽く領づいて、而かも無雜作に筆をとつて、

小出々々と待つ日にこいで

待たぬ日に來て屏風書く

と、墨痕淋漓として、滴らんばかりに書いた。

八 大呼一聲の示寂

白隠はその冬十二月、一先づ江戸を去つて龍澤寺に歸つた。其の後六年を経た明和二年、白隠は正に八十一歳の高齡に達したが、春から些か病むで松蔭寺に行つて臥て居つた。東嶺は江戸へ出て至道難禪師の舊蹟、小石川の至道庵を再興して、白隠が閑居の道場にしようと思ひ、其の旨を手紙で申送つたが、松蔭寺に在る門弟共は肯かなかつた。

翌年の正月、東嶺は弟子の文恭を遣はして白隠を迎へた。白隠も其の頃は二分衰弱して居たが、江戸へならば出て見たい氣もするし、それに至道庵を再興せるものだと聞いて、文恭に従つて籠駕に乗つて出立した。其の夜は箱根の宿の天野氏に宿つた。

ところが、松蔭寺に残つてゐた門弟四人、後を追ひかけて來て「さあ籠駕を戻せ！」

お師匠様を返せ。」と迫つた。此の時文恭はそれへ出て、色々宥めて、やつと追つて來た門弟共を歸らしめた。

再び江戸に來た白隠は、相變らず諸方の接化に多忙を極めたが、其の夏、三島の福聖寺からの請に應じて歸つた。前後二度の江戸入りも、既に高齡にも達して居つた事だから、目覺しい活動も出來なかつた。

明和五年、白隠は八十五歳、自分の墳墓の地と定めた龍澤寺に春を迎へ、玲瓏たる芙蓉の峰を打ち眺めながら、「あゝ好い正月ぢや。老僧は八十四になつたが、まだこんな好い正月を迎へた事がない。これも東嶺和尚のお蔭ぢや。あゝ目出たい〜」と大喜びであつた。

近來老衰甚だしかつた白隠は、其の正月から却つて非常な元氣で、處々の應化に

無盡の法益を施して居つた。やがて夏も過ぎ秋ともなつて、早や嶽南にも雪の降る十一月となつた。白隠は松蔭寺に歸つたが、再び病んだ。尤も病むと云つても老衰の事であるから、一向薬餌の効もなく、十二月七日に古郡氏が診療に來た時には、脈搏共に何等の異状もなかつた。

「別にお變りもござりませぬ。」と言ふと、白隠は一言の下に叱して、

「馬鹿ッ、三日前に人の死ぬる事が出來ないで、良醫と言へるかッ。」と。古郡氏は惟々として去つた。

白隠は自分の死ぬ日を知つて居つた。越えて十日には、後事萬端を遂翁に依頼して、翌る十一日の曉頃、右脇にして高臥してゐるが、「あゝ苦しい。」と大呼一聲、「ウーン。」と唸つたまゝ示寂した。

遺偈も留めず、作らず、飾らず、苦しいから苦しいと、無雜作に言つて、洒々落落、よい白隠の性格を物語るものではあるまいか。

あゝ、白隠の八十四年の生涯は、唯だそれ大呼一聲であつた。此の外に更に求むる處もなく、何の尋ぬる處もなかつた。彼の王陽明が、「我が心光明、又何を言はん」との臨終と相一致して居るではないか。

救諭を賜はつて曰く、「神機獨妙禪師」と。

## 左甚五郎

## 一 竹籠の水仙が百兩

三州吉田宿の、豊川屋文左衛門と云ふ旅宿に、或る日の黄昏時分、小さな包みを振り分けにした一人の男が入つて来た。宿のものが何處へ行くのかと聞くと、追ては江戸へ行きたいが、當分逗留するのだと言つて、其の夜は泊つたが、翌日になつても出立しなければ、二日三日と経つたが、出立をし相にも見えない。十日経つても二十日経つても動かない。斯うなると宿の主人も變に思つたので、或る日の事に、若しや旅籠錢がないので逗留して居るのではないかと思つたので勘定の催促。「誠に恐れ入りますが、店こそかうして張つて、暖簾や行燈の文字は大さうでも、

内輪の暮しは至つて細い稼業でございます。どうか御勘定を一つお願いいたしましたものでございまして……。」と、言はれて其の男は頭一つ搔くでもなく、「あゝ亭主、勘定の催促か。だが、實は俺は一文も金は有つては居らぬぞ。拂つて遣りたいのは山々だが、無い袖は振れぬでは……。」と澄し切つて答へた。

これを聞いた主人は驚いた。「いや、それは誠に困ります。そんな御冗談を有仰らないで、どうか一つお下けを願ひます。」「否や、冗談ではない。全く一文無しぢや。」「それは飛んでもない。第一、一文無しでお泊まりになるといふ法がございませうか。何とかして拂つて頂きたうございます。」旅籠渡世や茶屋小屋渡世は、薄情でありては稼業が出来ぬとまで言はれて居るが、金を有つて居ないと聞いてからは、追ひ出す譯にも行かないので、これまでとは打つて變つた取り扱ひ。朝晝晩ともに、

他の客が食ひ残した飯や汁を運んで来る。酒を持って来いと命じても、いつかな持つて来ない。

「これは困つた。飯は食ひ残りでも何でも、腹さへ満ちくなれば我慢も出来るが、好きな酒が飲まれぬは何より辛い。待て、何か一つ仕事をして、旅籠賃を拂つて、酒が飲める様にしなくやちやなるまい。」と、斯う呟いて、見ると庭の隅に竹藪があつた。と、何を思つたのか、其の竹藪から竹を伐つて来て、それを幾つにも割つて、座敷に持ち込み、びつたり唐紙を閉め切つて、何か頻りに拵へて居たが、翌朝になると主人を呼んだ。「へい御用でございませうか。」「ア、實は庭の竹を買つて、こんなものを拵らへたが、これが賣れさへすれば、お前の處の旅籠錢を拂つてやるから、これを表の往來からよく眼につくところへかけて置いて呉れ。」と投げ出した。

豊川屋の主人が取り上げて見ると、竹籠のやうなものゝ先きに、王のやうなものがついてゐるかと思へば、花のやうな怜好のものもある。「これは何でございませうね。」「情けない奴ぢや。お前のやうなものゝ眼には分るまいが、これは水仙を刻んだものだ。だが見るものが見れば分るから、表にかけて置いて呉れ。」「冗談ぢやございませぬよ。こんな水仙があるものですか。それに賣れたらなんて、誰がこんな何だか知れないものを買う人がありますか。」と、主人は頓と相手にならない。「だからお前は情けない目無だといふのぢや。何でも好いから吊して置いて見い。」と言はれて、主人はブツ／＼言ひながら、それを門口の、往來からよく見えるところに吊して置いた。

其の日堂々たる行列は當宿に入つた。それは細川越中守であつた。ところがど

したもののか、豊川屋の前で輿物がピッタリ停つたが、やがてまたホウ／＼と行つてしまつた。

それから少時してからであつた。豊川屋に一人の武士がやつて来た。

「豊川屋文左衛門とはその方か。」「へい左様でございますが。」「あれなる柱の投げ入れに挿してある、竹の水仙は賣り物が。」「へい……。」と豊川屋は怪訝な顔。「實は拙者は細川越中守様の家臣ぢやが、先刻御通行の際あれなる竹の水仙、殿様のお目に止まつたに依つて、早々本陣まで持參致せ。」

豊川屋の主人は驚いた。これはお目に止つたといふは、あんな詰らないものを掛けて置つたので、細川の殿様のお目障りになつたといふので、屹度お手討になるかも知れないと思つて、彼の男の室へやつて来て、此の事を話すと、「あゝ、さうか。

越中の守なら客種が好い。幾らで賣るかと訊いたら、百兩 鏝一文欠けても賣る事は出来ないと言へ。」主人は益々驚いた。「冗談ぢやない。お目障りになつて、お手討になるのではないかと思つてゐますのに、百兩で賣るなんて……。」「ハムムム大丈夫だ。まア持つて行つて見ろ。」と言はれて、主人は恐ろしく其の竹の水仙を持つて、本陣まで出かけた。

ところが、彼の男が言つた通りに、百兩 鏝一文欠けても賣らないと言ふと、「百兩では安いものぢや。」と言つて、竹籠の水仙と引かへに、百兩の金を呉れた。主人は狐にでも魁まれた様な思ひで歸つて来て、彼の男の前へ百兩の金をならべた。

「はムムムムどうだい。百兩 黙つて出したらう。そひつはこれまでの旅籠賃だ。取つて置くが好い！」と言つて、残らず主人に呉れてしまつた。主人はまるで夢に

夢見る心地、「あんな竹籠の水仙が、百兩に賣れるなんて、一體あなたは、何と云ふお方でございますか。どうかそれをお聞かせなすつて下さい。」と訊くと、「俺か。俺は甚五郎といふ、名もない彫り物渡世をするものだ。」「えつ、それではあなたが、あの有名な左り甚五郎師匠でございましたか。そんな事とは知りませす、飛んだ粗忽ばかりいたしました。どうか御許しなすつて下さい。」と、名前を聞いて二度吃驚、それからまた掌をかへした様な町郎な取り扱ひ、それから間もなく甚五郎は、吉田宿をあとに江戸表を志して出立した。

## 二 三井の大黒

甚五郎の父は伊丹正利と稱して、足利氏の臣であつたが、永祿年中兩公方に隙があつた。正利は亂を明石に避けた。處が未だ一子がなかつたので、其の妻は一子を

摩耶山に祈つた。けれども望みを達する事が出来なかつたので、唯だ其の事のみ嘆いて居つた。ところが四十八歳になつて始めて妊娠した。そして生れ出でたのは甚五郎であつた。

甚五郎は幼名を刀禰松と呼んだ。十三歳の折に父を亡つたので、母に伴れられて伏見に移つた。さうして番匠與平治といふものに頼り少ない身を寄せた。

甚五郎の刀禰松は、幼い時から彫刻を好んで、仕事にちよつとの閑さへあれば、何かと刻むのを楽しみとして居つたが、叩き大工で一生を終りたくない。と云つて榮耀榮華をしようと云ふのではない。唯だ好きな彫刻を、暇一ぱいして見たい——といふのが彼の望みであつた。

甚五郎は常に左りの手を用ひて居たので、則ち左り甚五郎と呼ばれるに至つた。



彼は至つて寡慾の男であつた。金が少しでもあれば、それが盡きて財布が如何に振つても、ちりんとも音のせぬ様にならねば仕業をしなかつた。金がなくなれば一心不亂に仕事をする。又金が出来れば酒を飲んで、ゴロ／＼寝轉んでゐるのが常だつた。

樂しきは貧しきにあり梅の花

これは甚五郎が吟さんだものであるが、この一句を見ても、其の人と爲りを窺ひ知る事が出来るのである。

江戸に出た甚五郎は、別に倚るべき人とてもなかつた。些かの事が縁となつて、淺草諏訪町の大工棟梁、政五郎といふ者の家に身を寄せた。處が毎日々々、酒を呑んで遊び暮して居たので、流石に太つ腹の政五郎夫婦のものも、飛んだ厄介者を背

負ひ込んだものだと愚痴して居つた。

恰かも其の年の暮の事であつた。政五郎は甚五郎に向つて、「どうだい。遊んではかり居ねえで、暮の市に出しやア縁起が宜いから必度賣れるから、大黒様や惠比須様でも刻んぢやア。」と言つた。

政五郎に斯う言はれて、「ウム、さうだ。」と、ウンと膝を叩いて思ひ出したのは、京都伏見に居た時分に、駿河町の三井八郎右衛門の手代久兵衛と云ふ者に依頼された、阿波の支店から祝つて呉れた運慶作の惠比須があるが、大黒様がないから是非彫つて呉れといふ事で、百兩で請合つたが、既に半金は其の時受取つて使つて了つたが、肝腎の大黒様はまだ彫つてやつてゐなかつた。甚五郎はそれを今思ひ出したので、江戸に自分が來て居るのを幸ひ、其の大黒様を彫つてやつて、厄介にもなつ

て居るし、それに暮れで諸費入用の事であるから、半金の五十兩を受取つたら、政五郎にそれを遣らうと考へた。

そこで木を選んで、仕事にかかる事になつたが、常に酒の中に浸つてゐる様な彼も、いざ仕事をするといふ事になると、一滴の酒だに飲まない。齋戒沐浴、仕事の出来上る迄は一室に閉ぢ籠つてゐて、決して他人に覗かしめず、事によると三日も四日も食事をさへせぬ事があつた。

扱て其の大黒様が出来上つたので、駿河町の三井へ手紙を持たしてやつた。政五郎の方では、三井へ何しに手紙を持たしてやつたのであらう？ 大方暮れから春にかけて小費も要るし、自分の家では斯うして毎日遊んでゐるので、無心も出来ない、大方駿河町の三井に、國者か何か居るので、小使でも借りにやつたのだらうと思つ

て居た。

政五郎は、此の男が名うての彫刻師の左甚五郎だとは知らなかつた。一寸見たところでは、間の抜けた人間のやうに、ボカンとして居るので、政五郎を始めみんなのものが、ボン州々々と呼んで居つた。其のボン州が大黒様を彫んだといふ。一體どんなものを拵へたかと、幸ひ甚五郎の留守の間に、甚五郎の室に入つて見るが、大黒様らしいものは何處にも見當らない。はてなと思ひながら、ひよいと見ると道具箱の上に、襪履に何だかくるまつて居るものがある。何の氣なしにそれを開けて見ると、中から出て来たのは五寸ほどの大黒様であつたが、見て居れば見て居るほど、まつたく生きてゐる様で、今にも笑ひながら何か言ひ出し相なので、政五郎も呀つと驚ろいた、「あいつ、ボン州くと云つて居るが、なか／＼只のものをぢやねえぞ。」

と、心ひそかに感心して居つた。

翌日になると、「此家に天下の名人、左甚五郎といふ方が在つしやいませうか。手前は三井の手代久兵衛と申すものでございます。お在ででございますたら、兼ねて京都にお在での節、お願ひ致して置きました大黒様が出来たといふお手紙でございますから、今日頂戴に出ました。どうかよろしくお取り次ぎ下さいますやうに……」と言つて来たものがあつた。三井から来たといふ、大黒様が出来たといふ、京都に居たといふ。これは的切りボン州に違ひないと思つたが、左甚五郎と云へば全く天下の名人である。まさかそんな人物でもあるまいがと思つて、甚五郎に此の事を通じると、自分の居間に通して参れといふので、其處へ案内したが、床は敷きつ放し、木屑や何かは足の踏み處のないほど散らばつて居る。

久兵衛は甚五郎から示された大黒様を見て、

「いや、どうもお見事でございます。定めて主人が喜ぶ事でございます。何れ主人とも相談の上で、改めてお禮には罷り越しますが、今日は取り敢へず、お約束の百兩のうちの、残り半金を差し上げて、此の大黒様は頂戴いたして参ります。」と言つて、五十兩の金を置いて、いそぐと歸つた。

「棟梁、これで餅でも搗いてお呉れ！」と言つて、甚五郎が政五郎の前へ投げ出したのは二十五兩包みが二つ、政五郎もはじめて有名な左甚五郎であつたと聞いて、これまでの失禮を大いに詫び、差し出された五十兩の金も押し戻したが、甚五郎は何と云つて返しても、自分の懐には鏝一文も入れなかつた。

### 三 遊女屋で海老を彫る

或る時であつた。甚五郎は二三の職人共に伴れられて、吉原に遊びに出かけたが、甚五郎は未だ曾てかう云ふ廓に遊んだ事がなかつた。

初めての事でもあり、甚五郎キヨロ／＼しながら引つ張り上げられたのは姿家といふ樓、其の夜の敵娼が七越といふ其の家のお職であつた。

甚五郎は散々に飲んだ揚句、花魁の部屋に入つて見ると、其處の床の間に横ものがかかつて居た。甚五郎豫ねて好きな道の事、ひよいと見ると、誰の筆になるものは知らぬが、夏藻に海老が描てあるが、其の海老がまことによく出来てゐて、今にもぴん／＼動きさうだ。

「あゝ、實によく描いてある。」と、甚五郎つく／＼感心して見て居つたが、外出の時も決して腰から離さなかつた革袋の中から二挺の鑿を取り出して、眼は横物の方

へ奪はれて居たが、手の方は床板が櫛の紅如輪、それを頻りに撫でて居つた。といきなり其の立派な床板に鑿をブツスリ突き刺した。名人常に愚なるが如しとや。如何に結構なものでも、そんな事には一向頓着しない。

甚五郎は床板を切りとつて、横物の海老を見ながら、コクリ／＼と彫りはじめた。やがて海老は彫り上げられた。甚五郎はそれを床の間に置いて、其の夜は紅燈の下に明し、翌朝黙つて歸つて了つた。

けれども甚五郎が歸るまで、花魁も少しも氣が附かなかつたが、あとで掃除をして居た若い衆が見つけ出して、「大變だ／＼、七越花魁の座敷の、床の間の板を切りとられた。」と言つて降りて來た。主人も聞いて吃驚して、來て見ると成るほど床板が切り破られてあるが、其の傍には海老の彫り物が置いてある。「おやッ、こんな彫

りものはなかつた筈だが。と、よくよく見ると、その海老の髭がピン／＼動くやうだ。曲つた胸中が延びたり縮んだりする様だ。

「一體、昨夜此の部屋へ入つたお客は？」「黒船町の甚さんといふ棟梁で……。」

「何、黒船町の甚さん……甚さん……。」と、小首を傾けて居た主人は、ボンと手を打つて、「黒船町の甚さんといふのは、的切り天下の名人と言はれた、彫物師の甚五郎さんに違ひない。」と、早速仕度をして、當時黒船町に家を構へて居た、甚五郎に會つて聞いて見ると、「誠にどうも申し譯のない事をした。あまりあの横物の海老がよく出来てゐたので、遂ひ夢中になつてあんな悪戯をしてしまつたが、後で濟ましい事をしたと氣がついたが、どうもしてしまつた事は致し方がない。氣づかれないうちと、今朝そこ／＼に歸つて來たところだつた。」と詫びると、姿屋の主人は却つて

恐れ入つて、どう致しまして、お詫びに預りましては恐れ入ります。お金を積んでお頼みしても、彫らうと思ひなさらなきや、なか／＼彫つて頂けるものぢやございませぬ。却つてお禮を申し上げねばなりません。」と、大いに悦び、甚五郎に禮を言つて歸つたが、これが何時しか評判となつて、甚五郎が姿屋の床板で彫つた海老は、勿ねる相だ。髭をピン／＼動かすさうだといふやうな事が、それからそれへと傳はつて、其の海老を見たらに登樓するものが引きも切らぬといふ風で、俄かに姿屋の店が繁昌する様になつた。

姿屋の主人は、新らしく暖簾を拵へた。それは柿暖簾にして、上の方へ海老の丸を染め出し、下へ姿屋と染め出したが、其の後は此の店を、人呼んで「姿海老」と言ふやうになつた。

四 神技に達した甚五郎

甚五郎に就ての逸話は、種々傳へられて居る。それ等の俗説の起るところを見ても、甚五郎の技が殆んど神技に達して居つた事が知れる。

天正年間中根來の亂を避けて、伏見京都に移住し、聚樂亭桃山城の承麿欄間及び其の他神社佛國に彫刻を残したが、誠に日光陽明門の眠りの猫などは、其の最も有名なるものである。

寛永十一年四月二十日、年四十歳(或は四十一歳とも云ふ)で歿したが、其の子に宗心といふものがあり、宗心の子に勝政と云ふものがあつた。勇孫和右衛門、玄孫半十郎から庄兵衛嘉兵衛と、代々左と稱して、京都今出川に住んで彫刻を以て業とし、何れも世に其の名を傳へられた。

榎本其角

一 困つた者

或る時、其の道の者が大勢集つて句會を開いた。そして我れこそ名句を吐かうと苦心して居る時、其の傍らに酔ふて仰臥して、熟柿臭い息を吹いて居る男があつたが、不意に、「アア、、、、、ウイ。はムムム、妙句を得たぞ。どうだ、みんな聞いて呉れ。

仰見銀河底。

とはどうだ。」と言つて得々として居つた。

それを見、これを聞いた運座の連中は、「またしても、其角には困つたものだ。」と

眉を擧めた。

其角はたしかに其の時代の一種の拗ね者だつた。

其角は本姓は竹下、近江堅田に生れ、父は榎本東順と云つて、某侯に仕へて居た

醫者であつた。其角は其の初めの名は順哲、父の業を繼いだが、書を能くし、佐々

木文山を師とし、後ち米南官を喜んで、別に機軸を出し、自ら寶晋齋と號して居た。

また俳諧を好み、芭蕉を師として大いに名を揚げ、芭蕉十弟子の頭に推された。其角は天性放逸で、世間の俗事に拘はらず、常に酒を飲んだ、その醒めたの見た事がなかつたと云ふ。

一旦は父の業を繼ぐには繼いだが、つまらなくなつたので江戸へ出た。そして堀江町に住んで居たが、其の頃は服部嵐雪、小川破笠と三人同居して、三人に蒲團が

只だ一枚、寝ると手足がニヨキ〜と現はれて居つた。又飯を食ふ時は、鮎菜一味のみで、而かも嘯傲自若たるものであつた。

生きながら死人となりて散り果て、

思ひのまゝに爲す業ぞよき

と詠じた彼は、此の歌に彼の性格の凡てをさらけ出して居るのである。

其角は世の無意味な習慣、煩瑣な細墨に束縛されてゐるのが厭ひだつた。思ふ儘

仕たひ放題に振舞つたのであるから、普通の俗人の眼には、困つた厄介者視されたかも知れぬ。

## 二 其角の逸話

或る時であつた。其角は冠里公の盆の會に招かれて行つたが、其の席上公は、「金

柑あつて銀柑なきは如何？」と戯れると、其角は言下に、「金玉あつて銀玉なきが如し。」と答へた。其の當意即智には、公も舌を巻いたといふ。

またある時、去る歴々から、一卷の點取りを遣はした。其角は一應それを開いて見たが、

「此の巻は餘り初心だ。俺が筆を入れるまでもない。連中の先輩に談じるがい。」とばかり、何の遠慮もなく返して了つた。

使ひのものは已むなく巻を受取つて、

「それでは、點料をお返し願ひたう存じます。」と云ふと、其角は平氣で、「否や、見料として取つて置く。」とて返さなかつた。彼は食ほるのではなかつた。これを食ふと見ては間違ひである。彼の胸中の洒落、事に拘泥する所がなかつたのだと視らね

ばならぬ。

元祿中、芝神明町へ轉居した。その頃の事、庚申の夜に大家と口論して、疥癩紛れに、「こんな家に居て呉れと頼んでも、誰か居るものか。」と言つて、荷造りをして自ら擔ぎ出し、聲高く嘲り呼ばりながら、夜中雪中庵へ引き移つて了つた。

其の後、萱場町に住んだ事があつた。處が恰かも其の隣家には大儒荻生徂來が住んで居つた。其角は徂來如きものも眼中にはなかつた。

梅が香や隣は荻生物右衛門

と口吟んで諷刺した。

赤穂義士の一人大高源吾忠雄は、俳號を子葉と呼んだ、即ち彼の友であつた。處が元祿十五年師走の或る日、久し振りに兩國の橋上で子葉に會つた。見ると衣は破



れ、煤竹を擔いで居るのを見て、俳歌の首句を以てそれとなく訊いた。すると子葉は直ちに其の下句をつけた。それによつて早くも子葉が主君の仇を報じようといふ存念を見抜いて了つた。俗説には、其の時其角ほどのものも、子葉の下句を聞いて判らなかつたと云ふが、それはあまりに子葉を偉からしめやうとしての説である。

其の次の夜、彼は友人と共に、或る一幕士の家に句會を催ふした。其の家は恰かも吉良邸に隣して居つた。處が夜半に及んで、激しい鬪戦の聲が聞えた。會して居つたもの一同は、顔の色を變へた。けれども中に其角のみは、既に其の事あるを知つて居つたので、些かも驚かず、一人ほく／＼喜んで居つたが、やがて屋上にのほつて、隣家の様子を覗つて居た。と忽ち門を叩くものがあつた、主人は立ち出で、

門を開いて之れを見ると満身血に染み、一禮して曰ふには、「拙者こそは淺野の臣大高源吾忠雄と申す者でござるが、只今同志と共に御隣家吉良邸へ、主人長矩の仇を報ひんため討ち入りましたが、火の元なども充分用心致して居りますれば、御迷惑は決しておかけ申さぬ覺悟でござりまする。よも御助勢などはござるまいが、萬一左様の事あつては、浪人共生々世々の恨みに存じまする。」と告げた。此の時主人が未だ答へもしないうちに、思はず知らずうれしさに、屋上にあつた其角は、足を踏み進らして落ちて來たが、痛いのも忘れて、「子葉どの、其角ぢやく／＼。」と、子葉の手を執つて涙を流して、悦んだり慰勞したりした。

### 三 俳句で雨乞

一茶の句が世に拗ねて居た様に、其角の句は氣を以て主として居た。其の雄高に

は師の芭蕉も常に感服して居つた。

有明の面落すや時鳥

うら枯や馬も餅喰ふ宇津の山

行水や何に止まる海苔の味

憎まれて承らふる人冬の蠅

稻妻や昨日は東今日は西

聲かれて猿の齒白し峰の月

文は後に櫻差し出す袂かな

冬來ては案山子に止る鴉かな

など、枚舉に遑がない。

また或る時、門人數人と舟を泛べて三圍神社に參詣した。すると其處にあまたの百姓が太鼓を叩いたり、鐘を鳴らしたりして騒いで居たので、何事かと聞いて見ると、照り續く早魃のために、水田の水は涸れ、畑のものは萎へて了ふので、雨乞ひをして居るのだと答へた。それを聞いた門人の一人は、「古名歌に神も感じ給ふて雨を降て給ふたといふたとへもござります。先生も如何でござります。俳句を献じて雨を乞はれましたは。」と言つたが、其角は固辭して立ち去らうとした。

ところが、其角の頭がツル／＼に禿げて、一見僧侶とも見えたので、百姓たちは追ひ縋つて、「大和尚様、どうかお助け下さい。」と肯かなかつた。

其角も止むなく俳句を吟んで三圍神社に献じた。處が其の翌日、盆を覆すやうな豪雨が來たので、百姓は初めて生き返つたやうな思ひを爲し、門人共は何れも驚い

た。それは元禄六年六月二十八日の事だと云ふが、其の時の句は未だに人口に膾炙して居る。

四 一生の終吟

寛永四年二月「春暖、閑爐に坐す」の句に、

鶯の曉寒し 蟋蟀

とあつて、其のまゝ病の床に臥し、僅かに七日即ち同月三十日、四十七歳を以て此の世を去つた。此の一句こそ、彼が一生の終吟であつたのだ。

臨終の時、無眼達磨の像を描いた。そして枕頭に待つた門人に遺言して、「これを懐中に納めて呉れ。」と。死骸は江戸芝の二本榎上行寺に葬つたが、無眼達磨の像も勿論其の遺言の通りにした。

晋子又は狂雷堂は、其角の別號であつた。而して其の著はす所の書には「俳番匠」「虚栗集」「雑談集」などがあり、句集に「五元集」がある。

# 澤庵和尚

## 一 和尚の略歴

澤庵は天正元年、但州出石邑に生れた。其の祖先は平氏三浦介義明で、即ち秋庭の一族であつた。澤庵名は宗彭、澤庵は其の號であつた。幼い時に父母に死なれ、浮夜の荒波に揉まれ、恰かも十歳の時、門の唱念寺といふ寺に入つて、宗洞宗の僧となつたが、十四歳の時勝福寺に入つて、禪を希先西堂に學んだ。先便ち歸戒を授け、且つ法諱を與へて秀喜と呼んだ。

澤庵は常に先の道話を聞いて、心に遊偏方參の志を抱いて居つたが、先順世の後董甫仲偶々宗鏡丈室に在つたので、澤庵は仲に學んで參禪して、須臾も倦む事

がなかつた。其のうちに仲は洛に歸る事になつたので、澤庵もそれに隨ふて大徳寺に到り、錫を掛けて其寺に留まり、其の名も宗彭と改めた。

當時眞如文西公仁公泉南の大安寺に寓して居た。仁は文字に長ずるものであつた。

澤庵はこれを聞いて、錫を飛ばして泉南に赴き、仁について書牕に研覃したが、一納冬を凌ぎ、一葛夏を過した。

或る日の事であつた。海念寺に祭があつて、澤庵も之れに預かつたが、生憎と着て居るものが甚だ垢れて居たので、朝日の昇る前に自らそれを洗濯して、朝日に乾くのを眞裸體で待つて居つた。

其處へトシくと戸を叩いたのは、同行を約して居つた他の僧であつたが、澤庵は裸體のまま、「拙僧は洗濯した一葛がまだ乾かないので、どうぞ先きに行つて下さ

れ。」と云つて、遂ひに戸を閉したまふだつたと云ふ。

其の後鏡は江州に移り、また南京に趣いたので、澤庵も随つたが、そのうちに鏡が示寂したので、澤庵は陽春祖塔を守つた。慶長丁未、澤庵三十五歳、一家は澤庵を推して大徳寺第圓座に置いて、黃徳禪席を繼がしめた。

是時又た龍興山南宗禪寺を領して、山に住むこと三月、太鼓を鳴らし、一偈を唱へて衆に辭し、出でて江南に歸つた。其の道筋にはあまたの信者が、隨喜の涙を流して待ち受け、其の前後に引隨した。

亥の年には、豊臣秀頼澤庵の道譽を聴き、使を派して之れを大阪に召した。けれども權門に媚びぬ澤庵は、固辭して遂ひに起たなかつた。また細川忠興は、一寺を建立して澤庵に其の住持たらん事を請ふて止まなかつたが、これ亦辭して就かなか

つた。澤庵は其の資性至つて世事を厭ひ、泉の天下邑に世俗を避けた。天和丁未の歳、筑前守黒田長政、筑前の大宰府の崇福寺を以て澤庵を招じたが、これにも應じなかつた。

澤庵は其の後南京の漢國に赴き、芳林庵に在つたが、間もなく城州薪の妙勝寺に到り、庵を結んで僑居した。また其處を出て但州の粉里に歸り、第宇を宗鏡の山後に結んで屏居した。丁卯の年偶々但州を出で、洛に入つたが、帝は澤庵の風采を聞き召され、之れを召し給ふたが、澤庵は恐れ多くも之れをも固辭して參朝しなかつた。さうして但州に歸ると、泉南の谷氏は祥雲寺を建立して、澤庵を延て開山の祖とした。澤庵は壇命に應じて開堂慶讚した。

これより先き、將軍家康は法禁を大、妙心の二寺に下して曰く、其道機僧臘兼

備せざる者猥りに住山を許す可らず——と。けれども家康が薨じてから台聽に達せず、勅を奉じて大徳に出世する者十四五輩、寛永丙寅幕府は重ねて嚴しい制を兩寺に下した。ところが翌年澤庵は玉室翁の法嗣正隱知を擧げて本寺席を董さしめた。是に於て幕府は澤庵及び玉室江月を江戸に召し出し、其の是非を詰問した。時に衆議は蜂起したが、澤庵も玉室も、共に固く持して前心を改めなかつた。幕府は有司に命じて、玉室を奥の棚倉に謫し、澤庵を羽の上城に貶した。澤庵上城に居ること四年、幕府も其の老年を憐れんで、之れを召し返して、洛寺に歸らしめた。上皇澤庵を召し給ふ。澤庵仙宮に入つて玄談し、洛を辭して但州に歸つたが、翌年また臺命を承けて山陰を出でたが、一日將軍は澤庵と玉室とを江戸城に招いて、宗門の旨意を問ふた。

澤庵は一々それに對應したが、其の後は屢々城内に侍して、佛祖の言教を布演した。其の後また澤庵は上洛したが、上皇は即ち國師號を賜はつたが、澤庵はそれも固辭して受けず、奏して大祖正眼禪師に國師號を賜はらんことを請ふた。上皇は其の言を嘉し給ひ、則ち大現國師を賜ふた。

寛永十五年、幕府は武州品川に巨剎を建立して、澤庵を請じて其の第一世としたが、これ萬松山東叡寺なのである。

晩年東海寺内に春雨庵を建て、隠れ、春翁又は暮翁と號したが、正保二年十二月十一日病んで示寂した。年七十三。澤庵は茶道を小堀政一に學んだが、今日用ひられて居る香の澤庵は、即ち此の和尚が發明したものだと言へられて居る。

## 二 釋迦の尻管め

前に述べたところは、名僧澤庵の略傳であるが、其の常住の逸話に至つては牧樂に違がない。

澤庵が、幼時まだ秀喜と呼んだ小僧の頃の事であるが、或る時大勢の弟子達が集つて、經文の稽古をして居た。其處へノツソリ入つて來たのは澤庵の秀喜であつた。

「やあ、嘗めてるな。」と突然秀喜は言つた。

「何だい秀喜さん、嘗めてるといふのは？」「嘗めてるぢやないか。」「だから何を嘗めてるかといふに……。」「分らないか。情ない奴ばかりだ。今お前達は何をしてゐるんだ。」「何だ其の事が、それならお前の方が分らないぢやないか。經文の稽古をして居るんだ。」「だから嘗めてると云ふのだ。」「……。」「一同は秀喜が言ふ、嘗

めてるといふ事が分らないので、顔見合はして怪訝な顔をしてゐると、「ハムムム、經文の稽古なんぞして何の役に立つ、お前たちはみんな釋迦の尻を嘗めてゐるんだ。」と言ふのを聞いて、一同亂暴な事を言ふにも程があると、呆れた口が閉がらなかつた。

一同の開いた口が塞がらないうちに、

「俺はちよつと眠るから、枕を貸して呉れ。」「冗談言つちや不可ない。此處には枕なんかありやしない。」「何、其釋迦の尻で可いから貸して呉れ。」「釋迦の尻とは？」「分らない奴等だ。經文の事だ。」「えつ。」「えつも糞もあるものか。」と言つて、いきなり他の弟子たちが、恭々しく持つて居た、經本を引つたくつて、それを五六冊重ねて枕となし、グウノ、高軒で寢てしまつた。

教も要らねば教へも要らぬ。直ちに天上の月を指す。法に泥ます理に囚はれず、應機接物出沒自在、當年の秀喜は、早くも高僧の資を顯はして居つたのである。

### 三 他人は女房になれぬか

澤庵會て、丹波の宮津に行脚をした時、其の地の西光寺といふ寺へ行つた。門前に戒壇石があるのは、言ふ迄もなく禪寺、寺内には大勢の僧が居る様子、頻りと讀經の聲が聞える。ところがどうしたのか、門前に老若男女が集つて騒いでゐた。

澤庵は何事かと思ひ、訊いて見ると、施餓鬼に參詣に來たのに、門に入れないので騒いでゐるのだといふ。「フム、成る程、立派な寺の様だが、何故參詣に來たものを門内へ入れぬのぢや。」と、澤庵不審に思つて居ると、其處へ門内から一人の寺僧が、紙へ何か書いたものを持つて來て、それをベツタリ門に貼りつけた。見ると、

無縁の者門内へ入る可らず。

とあつた。

それを見た澤庵は、ツカ／＼と門内へ入つて行つた。寺僧が之れを見て、此の乞食坊主奴とも思つたものか、いきなり和尚の袖を控へて、「コレ／＼、何處へ行きなさる。」「本堂へ參るのぢや。」「何しに本堂へ行きなさる。」「施餓鬼を見物に參つた。」「見物とは怪しからぬ。門前にある貼札が見えませぬか。猥りに門内へ入つてはなりません。昨年も施餓鬼の時に、門内へ大勢入つて、庭をメチャ／＼にしたりお賽錢を盗んだりした奴がある。それで今年は何も入れない事にしたので……お歸りなさい。」「これは驚いた。當寺は禪宗だらう。わしは禪宗の坊主ぢや。禪宗の寺へ、禪宗の坊主が參るのに不思議はござるまい。」「いや、例令同宗のもので、入



るべからずとしてある以上は、施餓鬼を受ける亡者に縁のないものは、一切入れる事はなりません。「然もは何かな、無縁の者は入つてはならぬと云ふのか。」「左様で。」「それでは、改めて俺が訊ねるが、他人は女房になれぬかの。」「……………」。「いやさ。他人は女房になれぬかと訊くのぢや。」「はッ……………」。「はッではない。縁のないものが寄らねば、此の世界は保つて行かれぬ。世の中ば持ちつ持たれつぢや。どうぢや、他人は女房になれぬかな。」

寺僧はグツと返答に困つた。和尚は如意で以て寺僧の頭をボカリ、「恐れ入りました。」

澤庵が入つたので、其の後からぞろぞろ門前に騒いでゐた連中も這入つて來た。

寺僧が住職碩山にこれくと話しをすると、「拙僧は當山の住職碩山と申すものでござ

さいますが、失禮ながら貴僧は……………」。「あゝ、拙僧かな。拙僧は澤庵といふ乞食坊主ぢやよ。」「えつ、扱ては禪師におはしましたか。」と吃驚した。

碩山は、和尚を客殿に通して、厚く之れをもてなし、何か當山に残るものを御認め下さいと料紙と硯を持ち出した。

和尚は頷いて、筆をとつて拂子を描き、其の上へ數行の贊を書いた。曰く、

遊ばんと欲す遊びて足らず

樂まんと欲す樂みて足らず

偽らんと欲す偽りて足らず

貪らんと欲す貪りて足らず

終に盜まんと欲す

と。これは目下宮津の西光寺の寶物として残つて居ると云ふ。

#### 四 悟りなば頭を剃るな

和尚が泉の天下邑に、浮世の塵を避けて庵を結んで居る時の事であつた。浮世の塵は厭ふて居るとは言へ、常に緇汁などをこしらへて舌鼓を打つて居つた。これを見た村人たちは、どうも亂暴な坊さんがあればあるものだと云つて居たが、或るとき、「和尚様、御出家がさういふ魚鳥を召し食つて宜ろしうございますか。」と訊ねた。

「オ、食ふとも食ふとも、

悟りなば頭を剃るな魚肉食へ

地獄へ行つて鬼に負けるな

ぢや、世間の腥坊主は魚肉を食はぬか知らぬが、俺は身體の爲めぢやから、薬として何でも食ふ。」

或る時であつた。不意に窓の外から、「什麼坐」といふ聲がしたので、見ると一人の禪坊主が立つて居つた。「説破。」「達磨舌頭誰か附與せん。」「角をためて手を殺す。枝を伐つて樹を枯らす、汝知らずや。」「はッ、ハッ、ハッ。」外に立つた禪坊主グツと詰つた。和尚は窓から半身を出して、鐵の如意で頭をコツン。「恐れ入りました。」「サア、お入り、今獨りで濁酒を飲つて居る處ぢや。恰度好い。サアお入り。」「然らば御免を蒙ります。」と入つて來た。「待て、何か一つ馳走をしやうかな。」と云つて碌なものはない。澤山あるのは水ぢや。水でも飲むかな。「水ではどうも。」「は、は、は、いや面白い。」と笑ひながら、自ら粥を炊いた、それに梅干を添へ、「サア

俺も食べるから、お前も此の粥を啜つて行きなさい。其のうちに月も出る、月を履んで歸らつしやい。「然らば頂きます」と、初對面に粥の馳走になり、月の昇るまで物語りなどをして、月が昇つたのを見ると、件の禪坊主は暇を告げて、戸外に出やうとしたが、思はず天心にかゝる月を見て、

夏の夜の影踏む道の忘れ貝

月に寄せ来る住吉の濱

と口吟んだ。和尚はそれを聽いて莞爾、「いや、なか／＼味をやるな。月に寄せ来るは面白い。交はる互ひの志は茲に在りか。又た何日来る？」「命あらば又明日出ます。」「死んだら拙僧が引導を渡してやる。」「死んでから導いて下されても役には立ちません。引導は息あるうちかと心得ます。」「なか／＼理窟を云ふな。御前は死ぬ

のが知れるかな。「へえ。「お前は眠るのが分るか。「……。「流石の禪僧も驚いた。如何なる人でも、死ぬのと眠る時は分るものではない。死ぬ迄と眠る迄は分るが、其の時は分らない。

其の後は此の禪僧、毎日のやうに和尚の庵を訪れて、其の教へを受けて居たが、或る日の事、四方山の話のうちに興じて居ると、戸外の方で、「大根を買つて呉れませんか大根々々、これぞ眞實の大違ひ大根。」と大聲で唳鳴つてゐる。和尚はこれを知り、

「妙な事を言つて居る哩、コレ／＼大根屋。」

「へい。「大根は柔らかいかな。「へい、大層柔らかうございます。「然うか、一把何程ぢや。「一把二文のと三文のとございます、これぞ眞實の大違ひで。「それ

だ。何も大根は欲しくはないが、お前の言葉の端々に、これぞ眞實の大違ひと申し  
て居るが、一體それは何の事ぢや。「へい、私はこんなつまらない大根賣りでござ  
います、私の弟が京都に往つて、近衛様の御家來になつて居ります。處が今度  
公卿様方がお集りで、御歌會とかがあるさうで、「これぞ眞實の大違ひなり」といふ  
下の句とやらはちやんと出来て居りまして、うまく上の句と云つて、初めに言ふこ  
とが出来たものには、御褒美を下さるさうで、弟が申しますには、兄さんは方々歩  
くから、何ぞ佳い句を考へて呉れと云ふ頼みでございませうから、そればかり考へて  
居りますものですから、遂に口癖になつて出るのでございませう。」和尚は思はず噴飯  
して、「さうか、いやそれはまことに面白い事ぢや。」と例の禪僧が傍らから、「私が一  
つ上の句を考へ出しました。」

二人往き一人はぬるゝ時雨かな

これぞまことの大違ひなり

とは如何でございませう。」

「なるほど、面白い。拙僧にも一句浮んだ。」

御簾となる竹の産衣や上草履

これぞまことの大違ひなり

とはどうぢや。「是れは御名吟でございませう。これノ、大根屋、これを頂いて行つ  
て弟に遣はせ。」「へい、有り難ふございませう。」大根屋は大悦びで、早速それを京都  
に持つて往つて、弟にやると、弟はまた自分で詠んだ様な顔をして、歌の會へ持つ  
て行つた。處が數ある中でそれが第一の名吟ぢやといふ事で、當然大根屋の弟が褒

美を貰つた。

### 五 澤庵漬の名の起り

資性瀟達な澤庵と、慧敏の三代將軍家光とは、自ら其の意氣が合つて居つた。家光が和尙に歸依して居つた事は一方ではなかつた。或る時の事、家光は和尙と四方山の話の末、和尙、予は近頃何物を食しても味がなうて困る。何か美味なものはないか。」と訊いた。

「それはいと易いことでござる。明日己の刻頃より、愚僧の休息所へ御出でを願ひます。尤も當日は愚僧が主人で、上様は御客でござれば、我儘を仰せられては甚だ迷惑を仕る。それから決して御中座なさらぬといふことさへ御承知下さらば、天下に又とない美味を差し上げます。」「いや、それは忝けない。翌日は生憎の雪で

あつたが、家光は天下の美味といふ、それを食ひたい一心で、雪を冒して和尙の柴折戸を叩いた。

「これは雪中ようこそ御越し、先づ茶室へお通り下され。」と、茶室へ導いた。

一家光を初め小姓どもも、和尙が天下に又とない美味を馳走して呉れるといふが、一體どんなものを食はすのかと、雪景色を眺めながら、今かくと待つて居つた。

己の上刻と云へば當今の午前十時、其の頃から待たして置いて、正午になつても和尙が出て來ない。二時になつても未だ馳走して呉れない。もう家光待ち草臥れて、本來なら中座する處だが、和尙との約束があるのでそれもならない。小姓たちももう空腹で堪らない。

やがて八ツ半と云ふから、當今の三時頃、やつと和尙が姿を見せて、「甚だ遅刻致

して恐れ入ります。澤庵手製の料理、何卒御賞美下されまするやう。」と、それへ運んだ膳部を見ると、黄色で四角な一寸四方ばかりに切つたものが小皿が二つつて、それに椀が添へてあるのみで、外には汁もなければ煮めもない。小姓のも皆な同じである。黄色なものは何か分らない。けれどももう充分空腹を催ふして居るので、そんな事を考へてゐる閑はない。「和尚、馳走になるぞ！」家光は大急ぎで椀の蓋をとつて見ると、中に飯が盛つてあつて湯がさしてある。湯漬けだ。

「いや、和尚頗る美味味ぢや。どうもうまい。代りぢやく。喰ふはく、小姓と競争でサラ／＼搔つ込んでやつと箸を置いた。「いや、實に甘かつた。予は生れて未だ斯やうな美味なものを食した事がない。時に和尚、只今食したあの黄色なものは何ぢや。」あれは大根の糠漬でございます。」大根の糠漬か、どうも美味いものぢ

やのう。「恐れ乍ら上様は征夷大將軍、人間富貴此の上もございませぬ。結構なものばかり毎日御食りでございますから、自然それがお口に慣れて、下々が食する事の出来ぬやうな美味なものでも、甘味がございませぬ。今日は愚僧がお招き申し上げ、御空腹を待つて、かやうなる粗食を差し上げましたが、美味ぢやくと召し食られました。以後美味を召しあがらうと思召したならば、何時も空腹を待つて御食事を遊ばすが宜しうございます。」と、それとなく將軍の奢侈を誡めた。

「和尚、先君は千軍萬馬の間を往來なされ、一日二日は食をとり給はなかつた事もあつたと承はる。予は祖父様の功勞で、天下の將軍となり、贅澤を致しては相濟まぬのう。」和尚は莞爾、「流石は御名君と、下々までも御噂いたします程の上様、あつばれの御意でございます。恐れながら以後はいよく御謹み遊ばさるやう。」と言

つて、和尚は短冊を取つて、それに、

貧しかりし時を忘れて食好み

木の實の多き秋の山猿

と認めて差し出した。

家光は大恐悦で歸城したが、翌日和尚を召し出して、「昨日の大根の糠漬は軍用になる。漬け方を一般教へて呉れ。さうして之れを貯へさせたい。」とあつて、大根の糠漬を大いに奨励した。後年大根の糠漬を澤庵漬と呼ぶやうになつたのは、即ち此處から起つたのである。

### 六 死にともない

名僧智識は自己の死期を知る。正保二年十二月の二日から、さしたる病といふで

もないが、何となく心地がすぐれないので、弟子達は勿論、有縁の者一同、驚いて和尚の枕頭に集つた。和尚は其の人達を見やつて、「愚僧も今度は定命限りあり、一人來て一人歸る。死んだからとて決して嘆いて呉れるな。愚僧が世を去つたならば、一同太鼓を叩いて踊つて呉れ。」と言つた。此の時柳生但馬守は、和尚の枕頭に進んで、「禪師に伺ひます。」「何ぢやの。」「禪師には遷化の期を御存じであらせられますか。」「ウム、昨夜な、彌陀が愚僧の許へ來て、今日來るか明日來るかと申す故、行きたうはないが行かずばあるまい。三四日経つたら行かうと約束をした。」と答へ、また、「あゝ、今日は一同のものが打ち揃ふて來て呉れたので誠に嬉しい。コレ／＼一同のものに馳走をしてつかはせ。」「畏まりました。」と、弟子たちはそれへ茶菓子を持ち出した。「コレ／＼茶菓子など持ち出して各くさい事をするな。何故酒肴を

持つて來ぬのぢや。酒でも呑んで魚でも食つて、身體を丈夫にして、五十年のものは六十年も生き延びて呉れよ。」と言つて、自ら沐浴して身體を淨め、黒染の法衣には木藍染めの袈裟、自から剃刀を取つて頭髮を剃り、やすやすと床に横はつて、「我が死體は後の山へ葬り、土を掩ふて去るべし。決して讀經する事勿れ、道俗の香典を受くる事勿れ、石塔をたつる事勿れ、像を作る事勿れ、我が行狀等を撰む事勿れ、衣食はすべて其儘の事。」

和尚の病はいよく重つた。將軍家光は使を立て、和尚の遺言を聞かしめると、只一言、「死にともない。」と言つた。使者は驚いて、「否や、何か他に……。」「嘘ではない。死にともないといふのは誠ぢや。あゝ死にともない。紫雲榎引かず、花降らす。」

さうして、大きく「夢」といふ字を書いて、終に正保二年十一月十一日、七十三歳の高齡を以て、眠るが如く大往生を遂げた。

死骸は遺言によつて、東海寺の後の山へ葬り、土をかけて其の上へ丸石を印に載せて、それがため澤庵和尚の墓のみは、未だに墓碑がない。



## 中井 櫻洲

## 一 偽つて貫つた見舞

櫻洲山人中井弘と云へば、彼の兆民と共に明治年間に於ける奇人の頭目である。彼は薩摩の櫻島の産であるが、薩摩と云へば西郷をはじめ、黒田、大山、東郷、野津なんどの、武者一片の者のみを産出する國とのみ思つて居たのに、山人の如き、何の此の世を三分五厘、茶化して暮した氣紛れものが飛び出すとは、面白い對照と言はねばならぬ。

山人は維新の際には、まだ血氣旺んな慷慨家であつた。曾て京都の新徴組に襲はれて、額に微傷を受けた事があつた。彼は逸早く舊邸に逃げ歸るが否や、晒木綿を三反ばかり買ひ込んで、頭から身體、足の爪先きまでもグル／＼繻帶をして、今にも死ぬやうな呻き聲を出して寝て居つた。

「薩州家の勸王家が新徴組の爲めに斬られた。」と云ふ評判がひろまつて、岩倉をはじめ、中井が出入りをしてゐる公卿連大いに驚いて、使者を遣はすと右の始末、これは至極の重傷に違ひないとの復命。それは氣の毒ぢや、黙つても居られぬ。それ見舞ひだといふので、忽ち山人の座敷は、金包みやら菓子折やらで充ばいになつた。

扱て山人は諸家の使が歸つたあとで、繻帶をかなぐり棄て、

「あゝ窮屈だつた。重傷を負ふて苦しむのも辛からうが、僅かな微傷を、重傷と見せかけるのも、亦なか／＼辛いものだ。」と、見舞ひの金を集め、それを懐中にして、

早速祇園に浮れ込んで、飲めや歌えで大浮れに浮れた。それと後で聞いた公郷連中、アツと呆れた口が塞がらなかつたと云ふ。

## 二 一計を案じて刺殺を免る

これも京都での出来事だが、其の時は山人が外國官判事で京に在つた。處が彼の役目が役目の事として、頗る攘夷黨の忌むところとなつて、彼の首をひそかに覘つて居つた。それと聞いた山人は、一計を案出して、數百本の扇を買ひ込み、それに自作の詩を片つ端から認め、三條の某店に與へて賣りひろめさせた。

其の詩に曰く、

月暗高良山下路

英雄憤墓在三松陰

と、攘夷黨の徒が、何氣なしにそれを買つて見て、其の詩が高山彦九郎を追懐する

ものなので、「計らざりき、中井の精神こゝに在らんとは。」と語り合ひ、竟に刺殺の事を止めたと云ふ。

## 三 集つた人より馬が丸顔

成島柳北と云へば、有名な幕府の奥儒者で、後に朝野新聞を起した人物で、今だに其の石碑は向島に在る。碑文は信夫恕軒の撰になつたもので、「其面驢の如し」と書いたので、大槻如電が、如何に事實であつたにしろ、死者を侮辱した書き方だと辯難したほど顔の長い人であつた。

或る時山人は、此の柳北を自宅に招いたが、柳北も柳北で、馬に乗つて山人の宅に出かけた。山人は玄關に出迎へたが、見ると馬でやつて來たので、

これはさて世はさかしまとなりけり

乗つた人より馬が丸顔

とやつたので、流石の柳北も、只だ苦笑するのみだつたと云ふ。

#### 四 芳川顯正に一杯喰はす

山人が滋賀縣知事を奉じて居た時、芳川顯正はまだ内務次官であつたが、地方巡回の序で、大津に立ち寄つた。

山人は恭しく芳川を土地第一流の旗亭に請じて、數多の藝妓を聘んで、歡待至れり盡せりといふ有様であつた。

東京に出ては、伊藤、山縣、井上の諸元老までも擲論する山人が、何故吾輩にのみこんなに叮嚀であるか、これはきつと流石の中井も、吾輩の威望に挫かれたのであらうと、芳川は得意満面、歡を盡して翌朝となつた。そして、いざ出立といふ場

合となつたので、隨行員を促し立て、正に汽車に乗り込まうといふ刹那、旗亭の女將は昨夜の藝妓連を伴れて見送りに來たので、芳川はいよ／＼悦に入つて、大いに自惚れて居ると、旗亭の女將は懷中から恐る／＼昨夜の勘定書を出して、芳川の前に差し出した。芳川はジロリ見て、「これは中井の方で……」と言はせも果てず、「中井さんの方へ申上げましたところが、御前から頂戴しろといふ事でございましたので……」芳川は何か言はうとしたが、藝妓の手前、驛員の手前、隨行員の手前と、いろ／＼な手前を憚つて、仕方なく大靴の中から百圓紙幣を掴み出して拂つたが、汽車が出てから、額の汗を拭つて、「あゝ矢張り中井の狸にやられた。」と頓首したが、歸京してから大臣次官で、大津に行くものがあると、大津は恐ろしい處だよと注意をしたといふ事である。

山人の奇行は枚擧に遑がない。東京府廳所屬の馬を大久保内務卿に賣り飛ばしたり、井上馨の處から金杯を失敬して歸つたり、要するに山人の眼には、先輩も何もなかつた。如何なるものでも、一列一隊に馬鹿に視て居たのである。彼が僅かに縣知事や府知事位で終つたのは、蓋しそれ等の事が大なる原因をなして居たのである。

## 中江兆民

### 一 尾行警官を捲く

有名な「一年有半」を著はして唯物論者の爲に萬丈の氣を吐いた兆民居士中江篤介は、中井櫻洲と共に數へらるゝ明治奇人中の頭目の一人であらう。

明治二十年の暮、保安條例のため、東京から三里以外の地に退去を命ぜられた。すると居士は書生を一人連れて横濱に退居した。處が横濱の警察では、警視廳の訓電によつて直ちに居士の宿所を警衛した。

翌日、居士は書生と共に外出したので、警官は見遁すまいと、何處までも之れを尾行した。處が此の尾行警官は、未だ居士の顔を知らなかつた。加之居士の姿はと

みると、股引袴天に腹掛け、麻裏草履といふ扮装であるから、どうしても居士とは受け取れない。

これに引きかへて、隨行の書生はと云へば、七子黒紋附の羽織を着て、仙臺牛の袴を穿いて居る。それに年は四十格好、鐘馗のやうな髭さへ蓄へて居て、如何にも堂々たる風采なので、警官は一途に書生の方を居士だと早合點して、肝腎の居士には目もくれず、書生の一舉一動にのみ注視しつゝ尾行すると、二人はとある十字路に出て、本人の居士は書生と別れて別の方面へ去つた。

けれども警官は、半日以上も書生とは知らずに尾行廻した。書生は警官を呼びとめて、

「オイ、僕は決して君等に尾行されるやうな者ぢやないが、君人違ひをしてや

せんか。」と訊いた。と警官は其の顔を見守つて、「あなたは中江篤介さんでせう。保安條例によつて退居を命ぜられた人ですから、其の行く先を突き止めよと、警視廳からの命令です。」と答へると、書生は噴飯して、「は、ムムムさうか。いやそれは御苦勞千萬、中江先生なら、先刻あすこの十字路で別れた方だよ。」と聞いて、警官も呀と驚いて、暫しは茫然自失の體であつたといふ。

## 二 借りた金を香奠

兆民居士、曾て某貴顯の喪に赴いて、棺前に跪いて合掌多時、やがて未亡人を小蔭に「ちよいと」と招いて、「奥さん、甚だ申し兼ねますが、金を二圓ばかり拜借いたしたいのですが。」と相談した。

忌中の混雑中、まして未だ涙も乾かぬ未亡人を捉へて金を貸して呉れといふ、隨

分非道いとは思つたが、未亡人もかねて居士の氣質を知つて居たので、快く二圓の金を出してやつた。すると居士は、「有り難ふ」と感謝しながら、更らに懐中から自分を持つてゐた一圓の金を出して、それと夫人から拜借した二圓とを合して都合三圓となし、用意して来た紙に包み、黒水引をかけて、香奠と記して、「奥さん、誠に恥かしいが。」と差し出したので、未亡人もこれはとばかりに二度吃驚。彼の蔽はず隠さず、何でも露出しなところ、他の追従を許さぬ天真爛漫がある。

### 三 居士の強い信念

居士が臨終の際、河野廣中の妻關子が、目白僧園の雲照律師を招いて、加持を授けようとする、唯物論の大本尊たる居士、いかでか之れに従ふべき、瘦せ衰へた

病軀を起して、律師の方を睨みつけ、今にも掴み蒐らんす權幕を示したので、律師も到底度し難いと断念で、其のまゝ歸園したが、律師は常に曰く、「虎豹と雖も至誠を以て之にのぞまば、我が法の下に服従せん。」と。斯ほどの強い信念を有つて居た律師が、遂ひに律する事の出事なかつた居士の信念は、はるかに律師の上にあつたと云ふべきであらう。

### 四 兆民の経歴

兆民は幼名を竹馬と云つて、高知藩の家に生れた。長じて篤介と改めたが、十三歳の時に父の卓介を亡ひ、専ら母の薫陶によつて人となつた。兆民の外に、青陵、秋水、南海仙漁、木強生などの別號があつた。

荻生三圭、細川潤次郎について蘭學を學び、慶應元年十九歳で高知藩の留學生に

選まれて長崎に遊び、平井義十郎に佛蘭西の書を學んだ。長崎に在ること二年ばかりで江戸に出て、村上英俊に就いて學んだが、幾くもなく放逸なために破門されて了つた。

これから横濱天主堂の僧に就いて學んで居たが、轉じて箕作麟祥の江戸の塾に入つた。其の後即ち明治の初年、福地源一郎が日新社を湯島に開く事になつて、兆民は其の塾頭に選まれた。

兆民は當時の政府が、學生に留學を許すに就いて、常に官立の學校出のものに限るのを憤慨して居つたが、曾て大久保利道に此の事を説き、自ら亦海外に留學しようとして企てたが、門前拂ひのみ喰はされて會ふ事が出来なかつたので、或る時利道の馬車の馬丁に頼んで、利道が退廳を待ちかまへ、其の馬車の後に乗つて行つて、利

道が其の邸に着くや、袂を控へて滔々と辯じ、また己れの希望をも告げて、留學の事を請うた。

利道も終に彼の熱誠に動かされ、明治四年兆民を司法省出仕に補し、佛國留學を命じた。兆民佛國にあつては哲學、史學、文學を修め、孟子文章軌範、日本外史などを佛譯した。

明治七年、政府が留學生の總てを召還するに當つて、兆民も歸朝して元老院書記官となつたが、其の後外國語學校長となり、或は番町に佛學塾を開き、或は政理叢談を發行して、ルーソーの民約論を翻譯し、或は西園寺公望の東洋自由新聞に、板垣の自由新聞に關係して、熾んに自由民權を鼓吹した。斯くして薩長藩閥の政府を打破しやうと努めた。それが爲めに政府は兆民を物色して居たが、自由黨解散して

自由新聞も亦廢刊するに至つたので、兆民は快々として酒にのみ浸つて居つた。

明治二十年 井上伯の條約改正に失敗したのを好機として、事を起さんとするものがあつた。そこで政府は保安條例を布いて、些かでも疑ひあるものは、悉くこれを同令に照して退居を命じた。即ち兆民も其の一人であつた。

明治二十一年、栗原亮一等と、大阪で東雲新聞を起し、筆を揮つて政治の大改革を叫んで居たが、越えて二十二年、憲法發布と同時に、逐客は悉く赦された。兆民は東京に歸つて、後藤伯の大同團結を主唱して政論を發刊するに際して、兆民は其の主筆となつたが、伯が友を賣つて入閣したので、茲に大同團結は解散した。兆民は自由黨を再興し、自由新聞、立憲自由新聞の主筆となつたが、明治二十三年大阪から選まれて衆議院議員となつた。

兆民は思つた。我が憲法は人民に權利を與ふる事が妙い。内閣は議會に對して何等の責任をも有せず、上院は下院と同一の權を有して居る。豫算協贊の權は、上院の爲に其の半を奪はれるものだ。今此の憲法を改めなかつたならば、人民の幸福は到底望むべくもないと。處が茲に豫算八百萬圓削減の問題が起つて、内閣と議會と衝突を來した。自由黨の土佐派と稱するものは、六百萬圓削減の折衷説を唱へ、終ひにそれが可決された。兆民は憤然議員を辭して民權新聞を起して政府と吏黨とを大いに攻撃し、また自由改進黨の聯合を設いて、改進黨の首領大隈重信、自由黨の首領板垣退助に、其の歩武を共にする事を誓はしめたのは即ち彼兆民の力であつたのだ。

明治二十五年、北海道小樽の有志が、北門新報を起すに當り、兆民は聘されて其



の主筆となつたが、少時でそれを廢め、札幌で紙店を開いた。次いで北海道山林組を立て、大いに實業に従事した。彼は軍用金をとるのえて、大いに成す所あらうとしたが、事多くは利なく、益々貧窮に陥つた。

それがために北海道を去つて京に出で、毎夕新聞の主筆に聘せられ、國民同盟會に投じ、以て長閑内閣の政友會に當つた。三十四年の暮、實業の事に關して大阪に赴いたが、これより先胃癌を疾み、三月危篤に瀕したので泉州堺に轉地して咽喉を割いたが、其の時醫師は「お氣の毒ですが、長くて一年半位しか壽命はございますまい。」と言つた。そこで兆民は、生前の所感を筆にしたか、八月には既に上梓する運びとなつたが、壽命は未だ盡きなかつた。一年有半は忽ち二十二版を重ねたが、それでも餘生は猶ほ盡きぬので、東京に歸つて、續一年有半（一名無神無靈魂）を記

し、十月に出版してこれ亦忽ち十七版を重ね、三十四年十二月十二日歿つた。年五十五、遺言によつて其の死骸は解剖に附し、葬るにも宗教の形式を用ひなかつた。

もす  
のね  
奇 人 變 人 終

大正十年八月三日發

日印

奇人變人

正價金壹圓五拾錢

不許複製

著者

樋口紅

陽

發行者

東京市麴町區麴町三丁目二番地  
福田滋次

郎

印刷者

東京市神田區西小川町二ノ六番地  
青木音

吉

印刷所

東京市神田區西小川町二ノ六番地  
大成

社

發行所

東京市麴町區麴町三丁目二番地  
電話九段二〇九一。振替一二〇八六

日本書

院

2-681

日 本 書 院 好 評 書 目

浪六皮肉文集	皮肉と警語	皮肉社會見物	世界皮肉文集	滑稽日本史	紅茶を啜りながら	小波世間噺	日米皮肉哲學
一、六〇〇 送一〇二〇	一、六〇〇 送一〇二〇	一、六〇〇 送一〇二〇	一、六〇〇 送一〇二〇	一、六〇〇 送一〇〇〇	一、五〇〇 送一〇二〇	一、五〇〇 送一〇二〇	一、五〇〇 送一〇二〇
漱石の猫	坊ちやんの其後	一圓札と猫	惡獸國見物記	金持犬貧乏人猫	人のアラ世間のアラ	赤裸々の女	諧謔世界小話
一、七〇〇 送一〇二〇	一、六〇〇 送一〇二〇	一、六〇〇 送一〇二〇	一、六〇〇 送一〇二〇	一、六〇〇 送一〇二〇	一、二〇〇 送一〇二〇	一、三〇〇 送一〇二〇	一、八〇〇 送一〇二〇

396

179

終